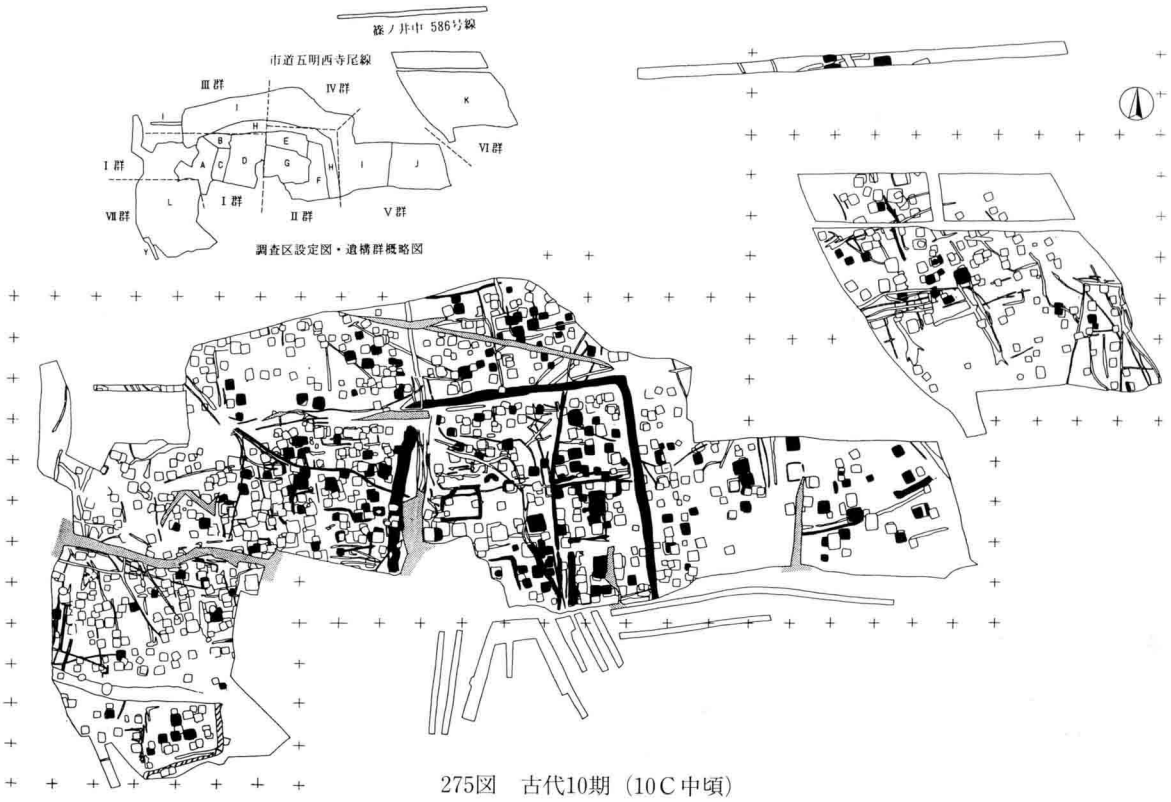
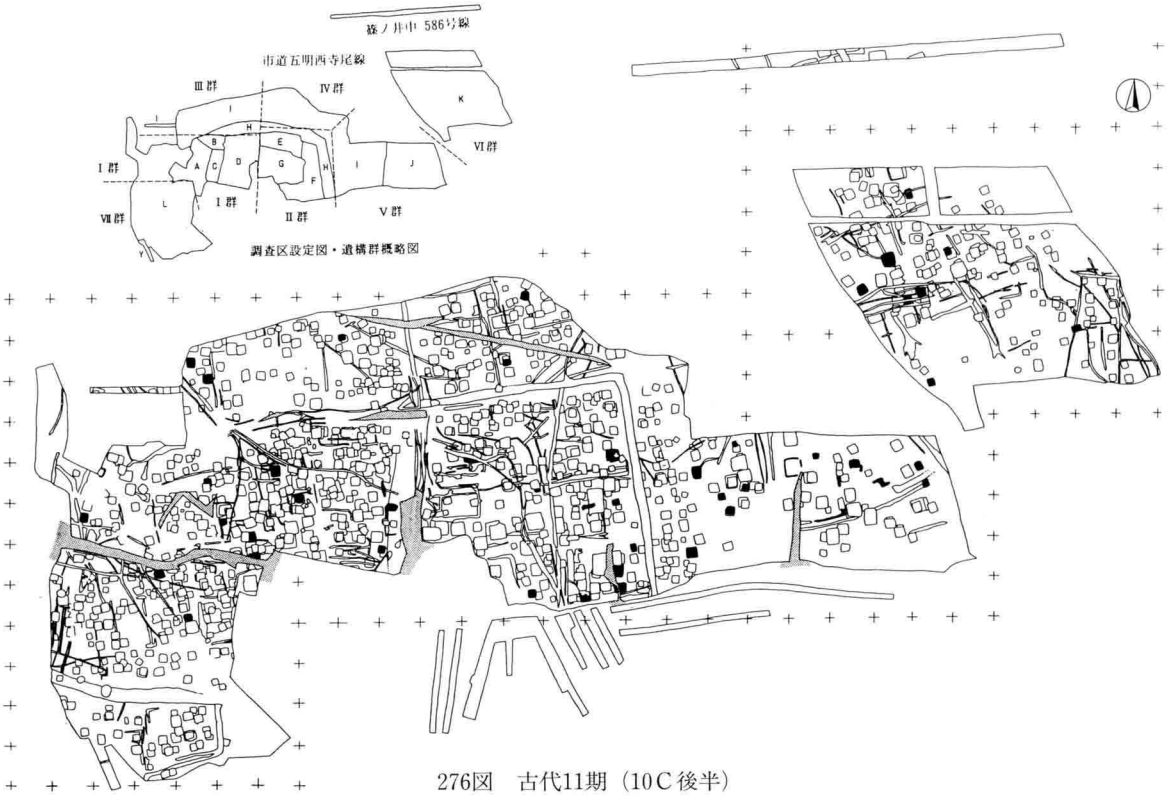


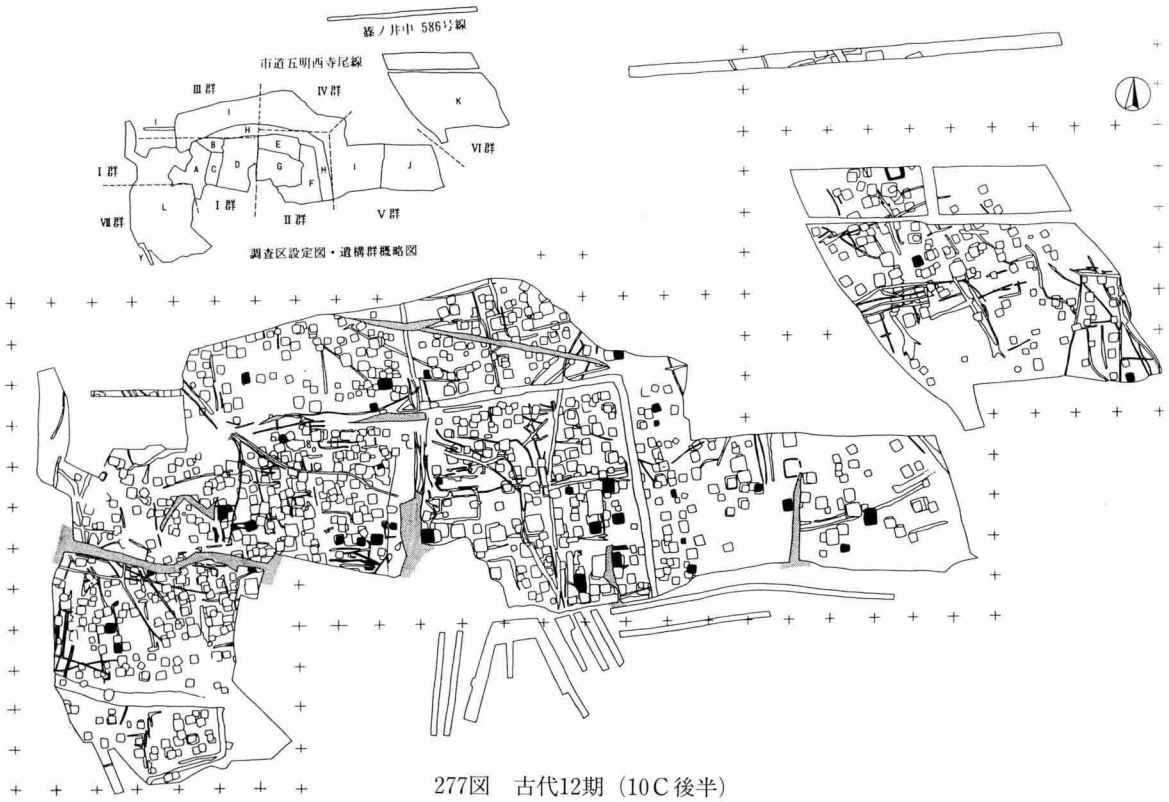
275図　古代10期（10C中頃）

南宮遺跡が最も繁栄する時期で、前期同様第Ⅰ・Ⅱ遺構群に住居址が集中し数を増す。集落を囲む大溝も機能しているが、自然溝は埋まり西脇に新たに浅い溝を掘削する。住居址が稀薄だったJ区にも集落が展開する。



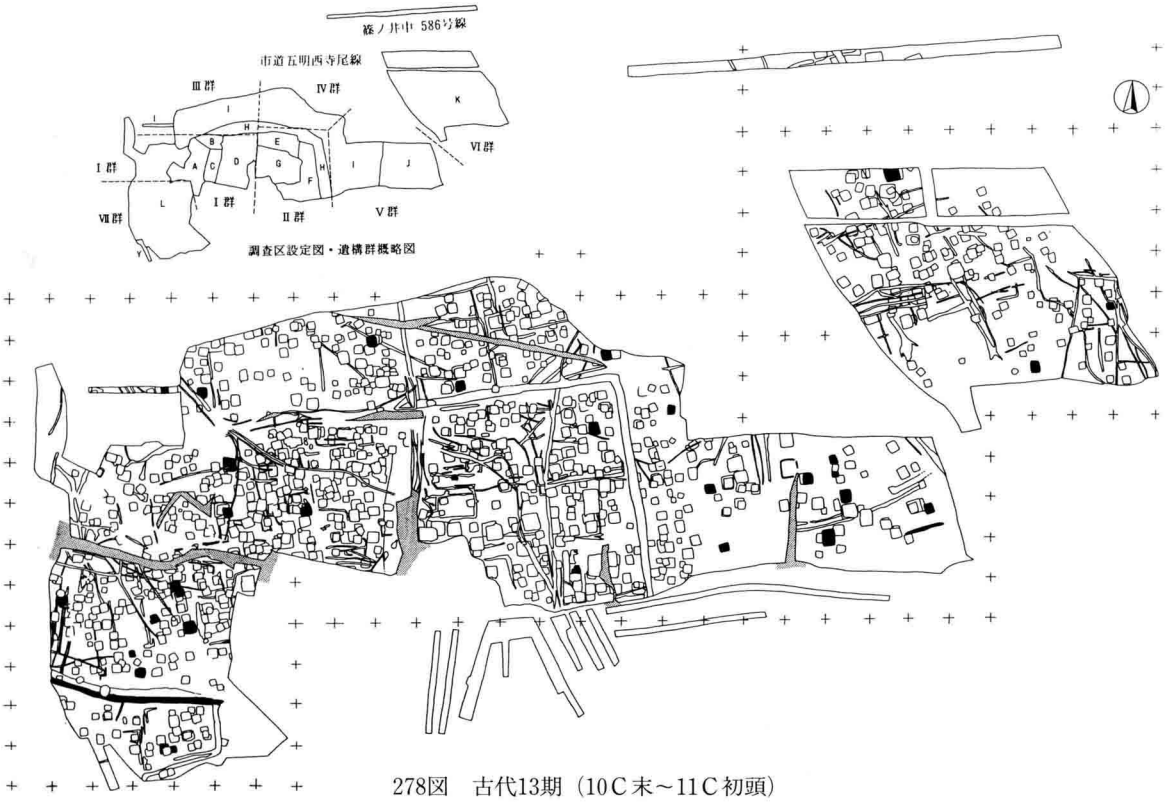
276図　古代11期（10C後半）

集落変遷上での第2の画期をむかえる。既に囲繞した大溝がも埋没してしまい、住居址数も前期の219軒から48軒に激減し、巨大集落の面影さえない。



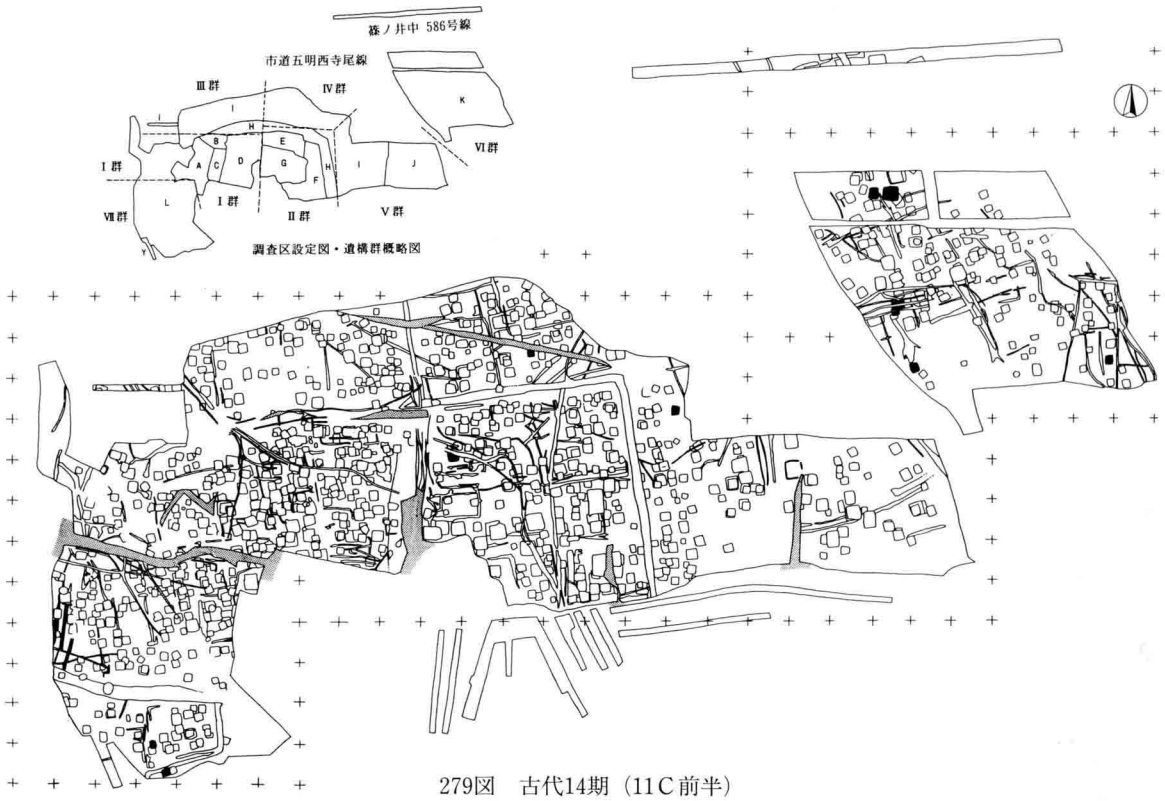
277図　古代12期（10Ｃ後半）

前期同様の衰退傾向の流れの中にあり、居住域は遺跡全域に認められるものの集落を代表するような核的存在はみとめられない。



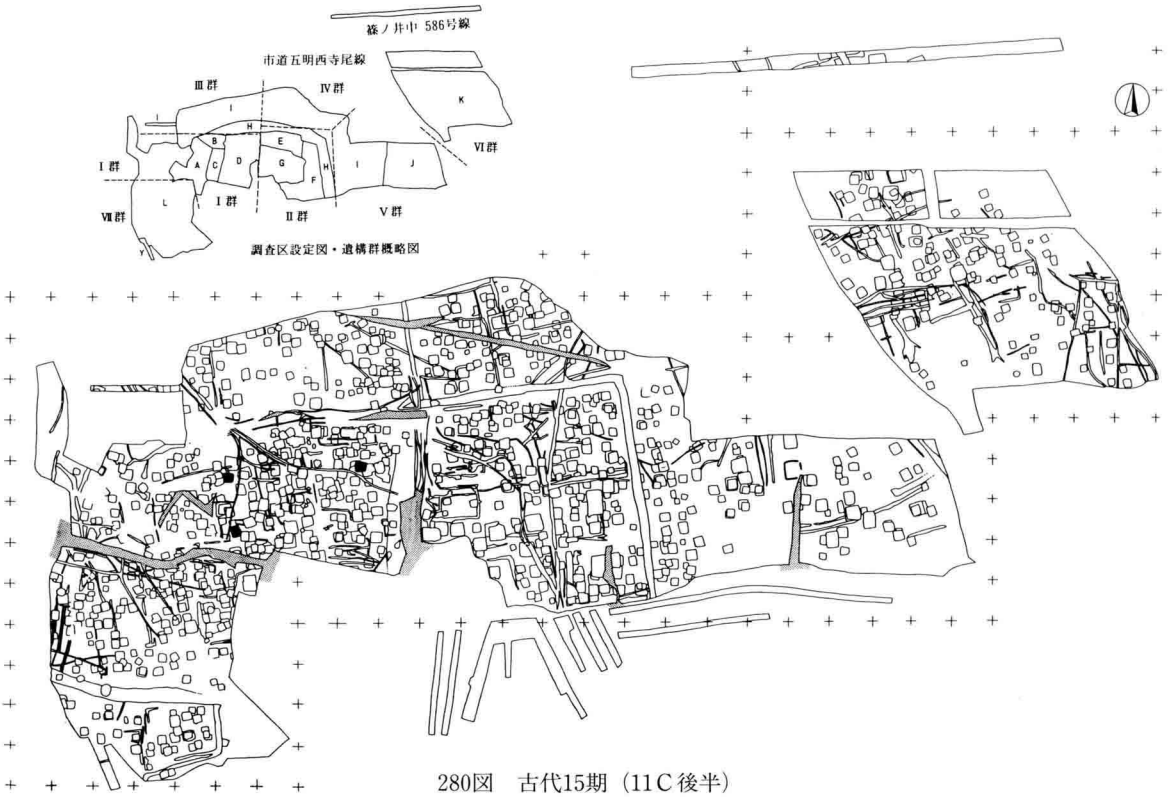
278図　古代13期（10Ｃ末～11Ｃ初頭）

住居址総数は35軒と減少傾向は続いている。Ｌ区とＪ区にまとまり的な様相がうかがえるものの、他の地域では点在する。



279図　古代14期（11C前半）

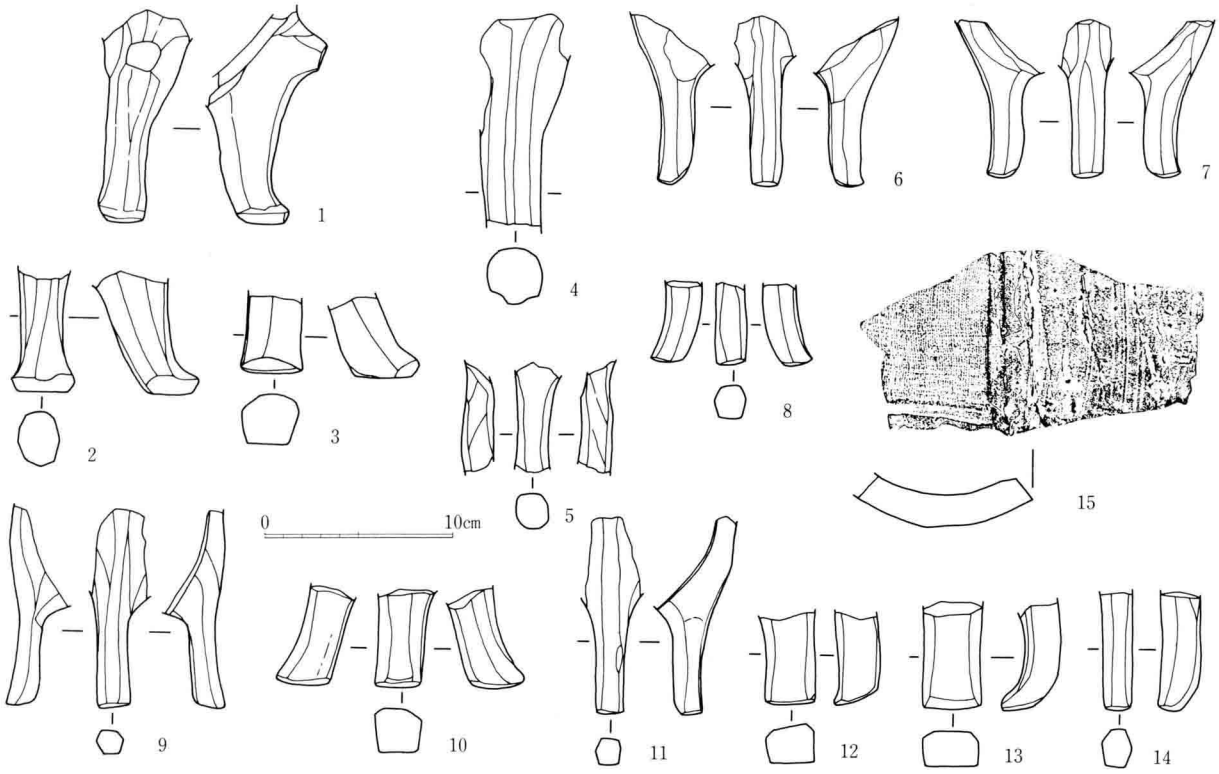
集落変遷における第３の画期といえる時期である。住居址数は極端なまでに減少し、わずか８軒にすぎない。１軒１軒が距離をおいて点在する散村形態の集落景観になってしまう。



280図　古代15期（11C後半）

第Ⅰ遺構群に３軒確認されるのみである。古代10期に繁栄を誇った南宮遺跡もこの期をもって消滅する。

（鳥羽英継）



281図　鼎形土器（１～11）・把手（12～14）・布目瓦（15）実測図（１：４）

5 特殊土製品

(1)　異形緑釉陶器（283図20）

ＥＳＤ１（10期）からの出土で、円錐形もしくは楕円形を呈する破片である。先端にヘラによる１条の刻みがいれられ、下方には左右対象にえぐりを作り出す。整形は外面が丁寧に磨かれ、内面がヘラナデによって仕上げられ、全面に暗黄緑色を呈する釉が掛けられている。器壁は薄く１～３㎜しかなく、残存最大径3.9㎝を測る。胎土は堅緻で黒灰色を呈する。この器形について実測図ではあえて男根の亀頭部を想定する。

(2)　鼎形土器（281図１～11）

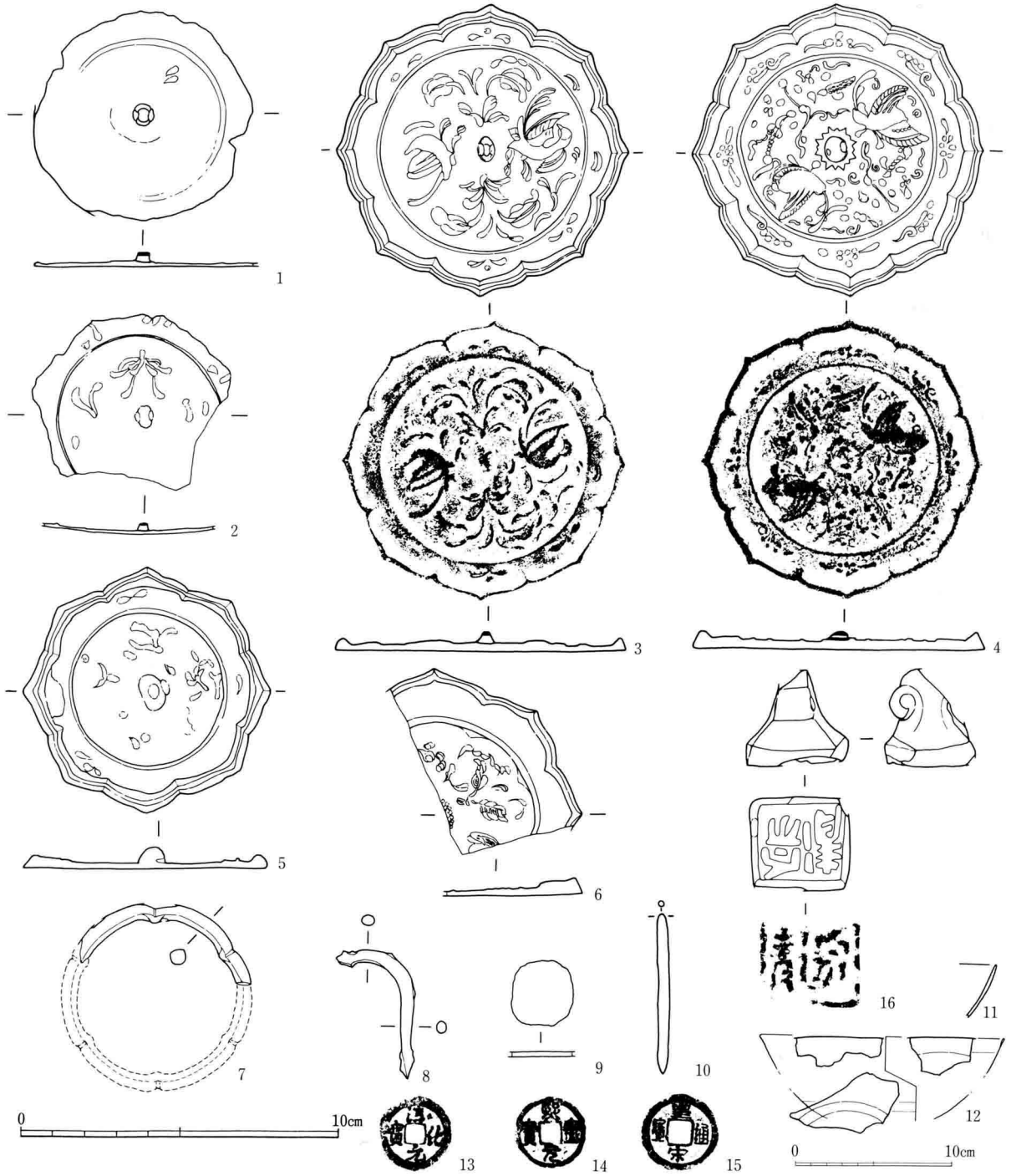
この器種は、獣脚鼎形鍔釜形土器と呼ばれている。いわば丸底の浅い羽釜に３本の棒状脚が付着しているもので、脚先端が外反して獣脚を思わせるものである。器種を火舎、機能を手焙りとゆうよりも香炉の一種と想定されている。本遺跡からは16個体出土している。羽釜部はＤＳＢ１（９期、37図12）・ＤＳＢ８（12期、40図23）・ＤＳＢ22（10期、45図19）・ＧＳＢ６（11期、107図42）・ＨＳＢ52（12期、135図43）・ＪＳＢ32（10期、198図10）から各１個体出土している。１・２は同一遺構からのもので整形・色調から同一個体と推定される。出土遺構は住居址・土坑・溝址であるが、９期に出現し10期に盛行するものとみられ、Ｊ区の１個体を除きⅠ・Ⅱ遺構群に限られていること、個体数の少なさと共に特殊性のある土器であることに注意する必要がある。内面の黒色処理は施されない。１・２はＡＳＢ38（10期）、３はＡＳＢ39（12期）、４はＣ検出面、５はＣＳＫ11、６はＤＳＤ８（10期）、７はＤＳＤ９（９期）、８はＤＳＢ15（10期）、９はＦＳＢ15（10期）、10はＦＳＢ35（10期）、11はＦＳＢ45（10期）からの出土である。12～14は実測図上で先端部が内傾する特色があり、12・13の断面が方形状を呈していることから把手と考えられる。12・13はＦＳＢ44、14はＦＳＢ45からの出土である。

(3) 布目瓦（281図15）

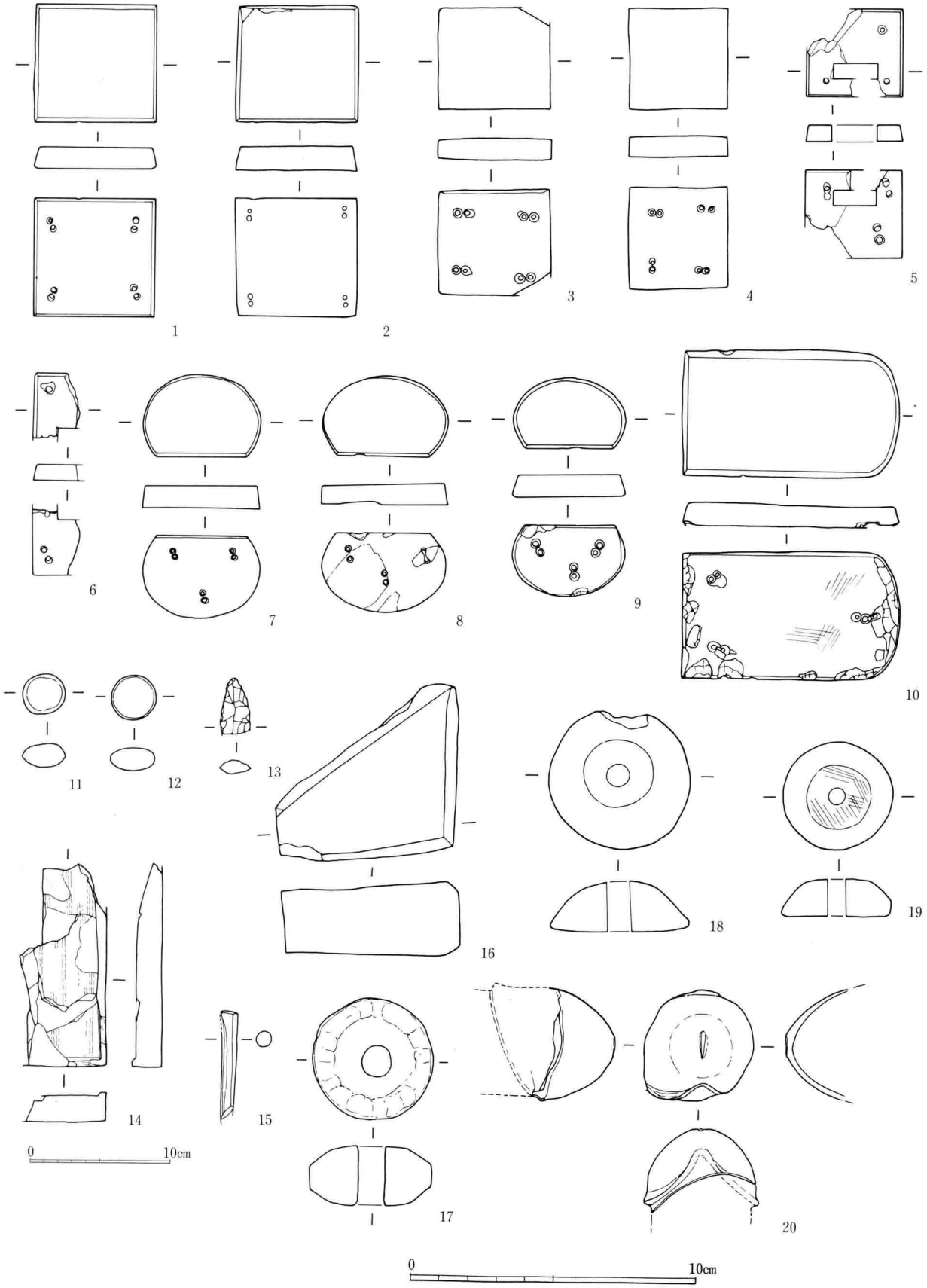
全調査地から２点出土している。遺構出土のものはＧＳＫ27（９期）から出土した15のみで、内面に布目がみられ、外面はヘラケズリが施される。最大厚0.7cmの丸瓦で灰白色を呈する。本遺跡で用いられたものではなく何らかの理由で持込まれたものである。ちなみに近隣の古瓦出土遺跡には西方約4.7km隔てた長野市篠ノ井石川に上石川廃寺跡、千曲川を越えて南東約２kmの松代町清野に道島廃寺跡がある。

(4) 宗清銘土製印鑑（282図16）

ＬＳＢ151（９期）の床面から出土した。住居址は遺構密集度の高いＩ遺構群側に位置し、ＬＳＢ171に内包され、何も変哲がない3.9m×3.6m規模の小型なものである。頭部と印側の一部が欠損する。印側手持部の両面に



282図　銅（１～15）・土（16）製品実測図（１：２，10～13は１：４）



283図　石製品（1～19）・異形緑釉陶器（20）実測図（1：2，14は1：4）

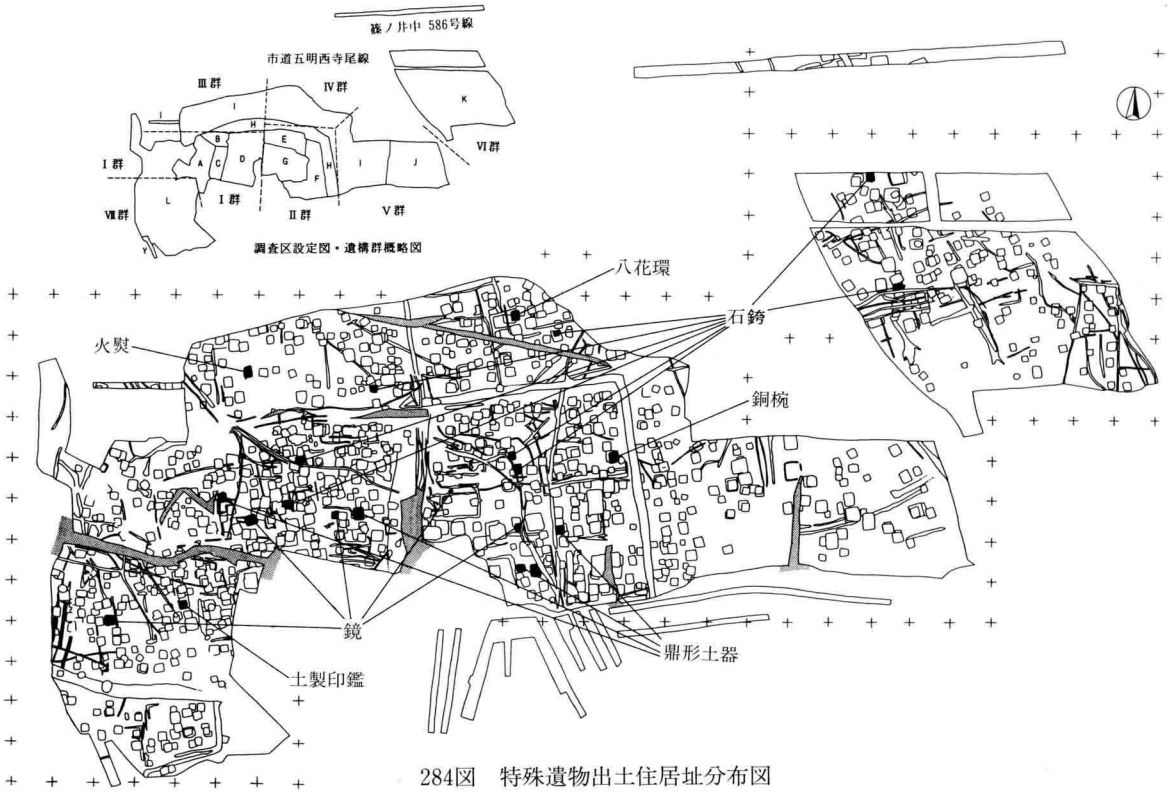
は棒状粘土が添付され、渦状に浅く刻まれている。輪郭は有郭で、高さ3.1cm、印面縦3.0cm・横3.1cm、印側高0.7cmを測る。印字はヘラまたは金属器で陽刻されるが鋭さがない。

6　銅製品

(1)　古鏡（282図１～６）

素円の和鏡２面（１・２）と瑞花双凰八稜鏡４面の６面が出土している。１・２・５は数度の踏返しのためか背面の鋳出しが悪く雑で、瑞花とみられる模様が判読できるのみである。５の紐孔は貫通しない。同図の９も薄く平板状であることから和鏡の可能性が高い。和鏡は青銅製で、八稜鏡は白銅製で６の鏡面は銀色を呈する。全ての古鏡は凸面鏡である。出土遺構はⅠ・Ⅱ・Ⅶ遺構群に限られるが、一辺３ｍ～５ｍ代の通常の住居址からの出土である（284図）。ただし、ＬＳＢ26から２種類２面の古鏡が出土していることに注目し、司祭者もしくは管理者の家と考えたい。用途は祭祀用とみられており、10期を中心に使用され、祭祀行為は12期まで継続していたものと思われる。

番号	規　模　(cm)					紐	紐座	遺　構	遺構図	備　考
	直径	界圏径	縁高	器面厚	紐高					
1	(7.0)	5.1	0.15	0.1 ～0.17	0.3	分銅型	円圏	ＡＳＢ25	１分冊－15	和鏡、12期
2		5.2		0.1 ～0.12	0.3	分銅型	無	ＬＳＢ26	１－152	〃 、12期
3	9.3	6.7	0.4	0.2 ～0.3	0.3	分銅型	無	ＤＳＢ11	１－29	八稜鏡、10期
4	9.25	5.9	0.6	0.3 ～0.35	0.3	素　紐	花弁	ＬＳＢ26	１－152	〃 、12期
5	7.9	5.2	0.4	0.15～0.35	0.5	素　紐	無	ＧＳＢ16	１－70	〃 、11～13期
6	(9.4)	(6.4)	0.5	0.15　0.5			顆粒	ＧＳＫ36	１－186	〃
9				0.18				ＩＳＢ72	１－104	和鏡？、10期



284図　特殊遺物出土住居址分布図

(2) 八花環（282図７）

八花鏡の縁部を思わせるが、鏡面を打ち抜いた痕跡は認められない。ただし、実測図右端折断面は研磨されており、破片の再利用が考えられる。ＩＳＢ248（10期）からの出土である。銅製で青白色の錆が覆う。外径5.4cm・内径4.9cmと推定され、環の断面は隅丸菱形を呈し縁高0.5cmになる。

(3) 火熨（285図１）

ＩＳＢ115（12期）より１個体が出土している。口縁部は体部より鈍い稜線をもって大きく外開し、端部は玉縁条を呈し受口になる。内面には６条の細い隆線が巡り、一端に３個の把手装着孔がうがたれる。体部（火袋部）は直線的に僅かに外開し、外面の中位付近に１条の段を鋳出し、内面には条線痕が残存する。底部は丸底気味になる。口径16.5cm・器高5.7cm・底径10.6cm・器厚1.5～2.0mmの法量である。器面は黒褐色を呈し、内面の体部と底部には緑青の錆がうく。

(4) 銅椀（282図11・12）

11はＤＳＢ１（９期）からの破片出土で、全体の器形・法量等は不明である。器壁の最大厚は１mmである。12はＨＳＢ50（11期）から破片で出土したもので、底部からの内弯角が大きく外開する。口縁端部が玉縁状に肥厚するほかは0.5mmに満たない器壁になる。体部下方に毛引状の２条の沈線が巡る。色調は黒色を呈し、光沢がある。口径は15.6cmと推定する。

(5) 棒状製品（282図８・10）

８はＨＳＢ４（８期）からの出土で、結果的に折釘状になったものとと思われる。10も釘と推定され、ＪＳＢ34（10期）からの出土である。共に断面は円形を呈する。

(6) 古銭（282図13～15）

13は淳化元寳（990年・北宋）でＤ区検出面、14は熙寧元寳（1064年・北宋）でＥＳＤ７、15は皇宋通寳（1039年・北宋）でＬＳＥ１からの出土である。この他ＨＳＤ10からは銭種不明の20枚一連銭が出土している。

7　特殊石製品

(1) 石銙（283図１～10）

銙は帯に取り付けた金属板のことで、石製品等の場合は石銙と呼ばれている。また、石製品の場合は石帯とも呼ばれる。本遺跡からは金属製品は認められなく全て石製品である。出土分布をみるとⅠ遺構群に３個（巡方２・鉈尾１）、Ⅱ遺構群に２個（巡方・丸鞆）、Ⅶ遺構群に２個（巡方）、Ⅲ（丸鞆）・Ⅳ（巡方）・Ⅵ（丸鞆）遺構群からは各１個出土している（284図）。また、Ⅵ遺構群に属する市道五明西寺尾線地点から巡方が１個している。遺構群ごとに分布している点や、遺構の密集度におおじて個数にばらつきがある点でも本集落の性格の一端を表しているのではないかと思う。しかし、出土した住居遺構においては一辺２ｍ代が１軒、３ｍ代が３軒、４ｍ代が３軒の小型に属するもので、５ｍ代以上の大中型住居址にはみられない。

①巡方（１～６）　方形または台形を呈するもので、平板のものと中央下方に長方形の透かし孔があけられているものの２種に大別される。前者は0.5mm程の規格法量に差がみられるが、厚さはほぼ同じである。後者は平板のものよりさらに小型で律令時代の金属巡方同様透かし孔を有し、帯留め孔が表面まで貫通している特色がある。佩刀用の特殊性も考えられる。帯留め孔は裏面角隅に１対２個の潜穴がうがたれる。

②丸鞆（７～９）　楕円形の長軸側面一端を直線化した形態で、巡方と同様大小の差がある。官位の差によるものであろうか。帯留め孔は下段に２個、上中央に１個配される。

③鉈尾（10）　大形の巡方・丸鞆に伴うものと考えられる。帯留め孔は３か所にみられる。

④鉸具（292図11・12）　いわゆるバックルである。単独出土で馬具の可能性もあるが、２個共Ｋ区・Ｌ区の石銙出土遺構と約20ｍと近接していることを考慮してこの部類とした。11はＬＳＢ97、12はＫＳＢ12からの出土である。共に錆の付着が著しく正確な形態や法量は不明であるが、11は全長7.8cm・軸受幅5.1cm、12は全長5.5cm・軸受幅4.2cmを測る。他にＬＳＥ１から同種と思われるものが出土しているが、土を巻込んだ錆のため実測不可能である。

番号	種名	遺　構	法　量　(cm)			透かし孔		石材	色調	備　　考
			縦	横	厚	縦	横			
1	巡方	ＣＳＢ３	4.1	4.3	0.75			蛇紋岩	緑灰色	光沢、潜穴斜行、８期
2	巡方	ＩＳＢ220	4.1	4.25	0.8			流紋岩	灰白色	裏面鋸痕、潜穴に磨耗無し、10期
3	巡方	ＥＳＢ３	3.6	3.95	0.8			流紋岩	灰白色	側面擦切痕、９期
4	巡方	Ａ検出面	3.55	3.95	0.7			流紋岩	灰白色	潜穴１個逆孔
5	巡方	ＬＳＫ54	3.1	3.4	0.6	0.55	1.6	蛇紋岩	緑青色	光沢、小ＬＳＤ24
6	巡方	ＬＳＢ154						蛇紋岩	緑青色	光沢
7	丸鞆	ＨＳＢ４	2.9	4.15	0.8			玉髄	淡白色	光沢、８期
8	丸鞆	ＫＳＢ35	2.8	4.4	0.75			粘板岩	黒色	半光沢
9	丸鞆	ＧＳＢ５	2.25	3.9	0.7			粘板岩	黒色	光沢、８～９期
10	鉈尾	ＣＳＢ18	4.4	7.6	0.7			粘板岩	黒色	半光沢、裏面擦痕、９期
市道	巡方	ＳＢ４	4.1	4.2	0.8			粘板岩	黒色	半光沢、潜穴斜行・平行

(2)　丸玉（283図11・12）

ソロバン玉形を呈し、全面が磨かれ光沢を帯びる。11はＦ区検出面出土で、直径1.45cm・厚0.8cmを測る。流紋岩製である。12はＤＳＢ63（10期）からの出土で、直径1.6cm・厚0.8cmを測る。玉髄製である。

(3)　石鏃（283図13）

本遺跡周辺はもとより川中島扇状地において縄文時代および弥生時代中期の遺跡は確認されていない。ただし、千曲川自然堤防上の横田遺跡群には弥生時代の遺構が展開している可能性があり、そこからの持込みが考えられる。出土遺構はＬＳＢ54で、チャート製である。

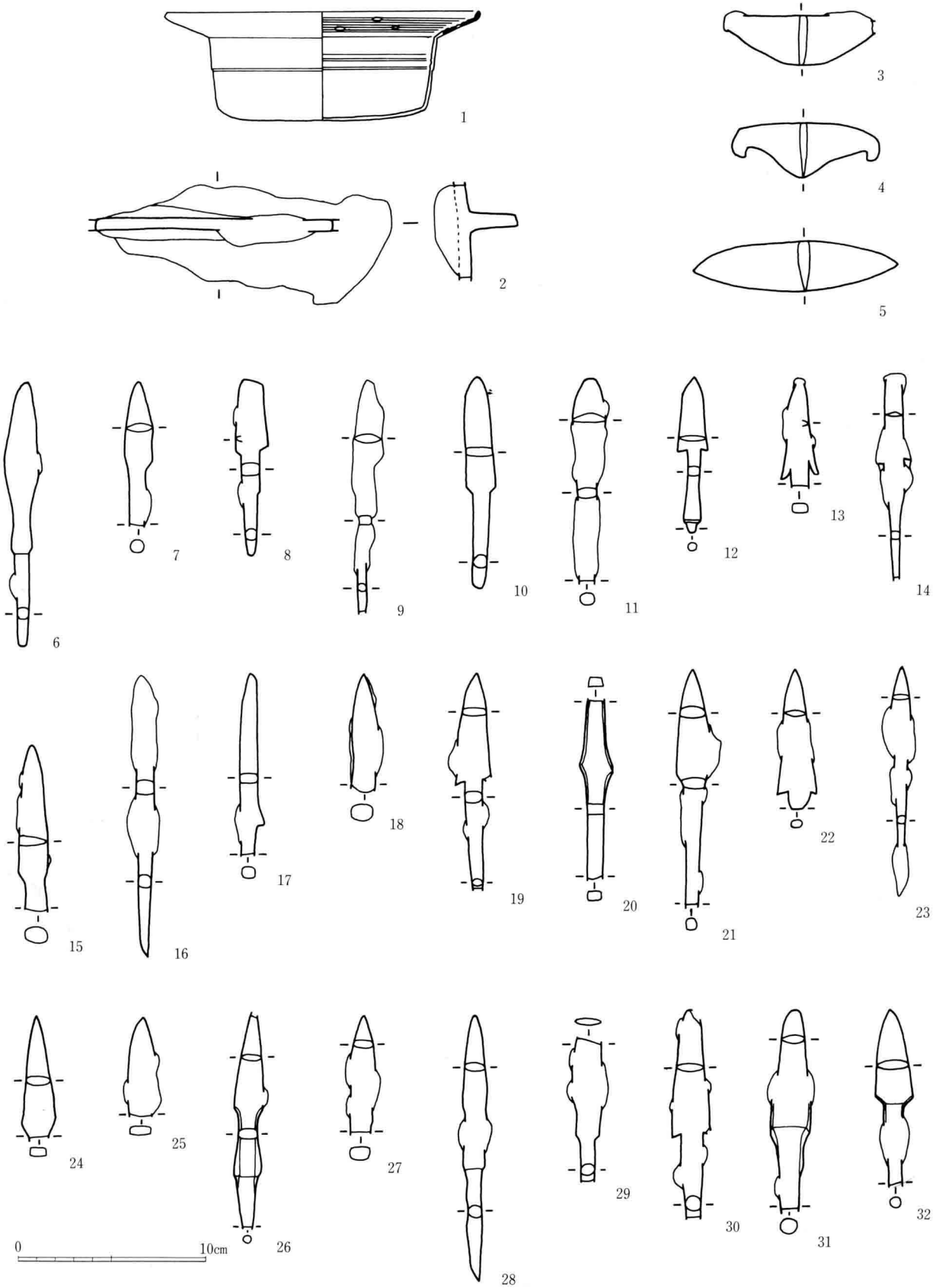
(4)　石硯（283図14）

須恵器や灰釉陶器を再利用した転用硯が数多くみられるが、本調査地から出土した唯一の石硯である。ＫＳＤ６からの出土で、破損したため投棄されたものであろう。上端の破損部が海部の限界であるとすれば全長14.6cmを推定し、横幅は不明である。粘板岩製である。

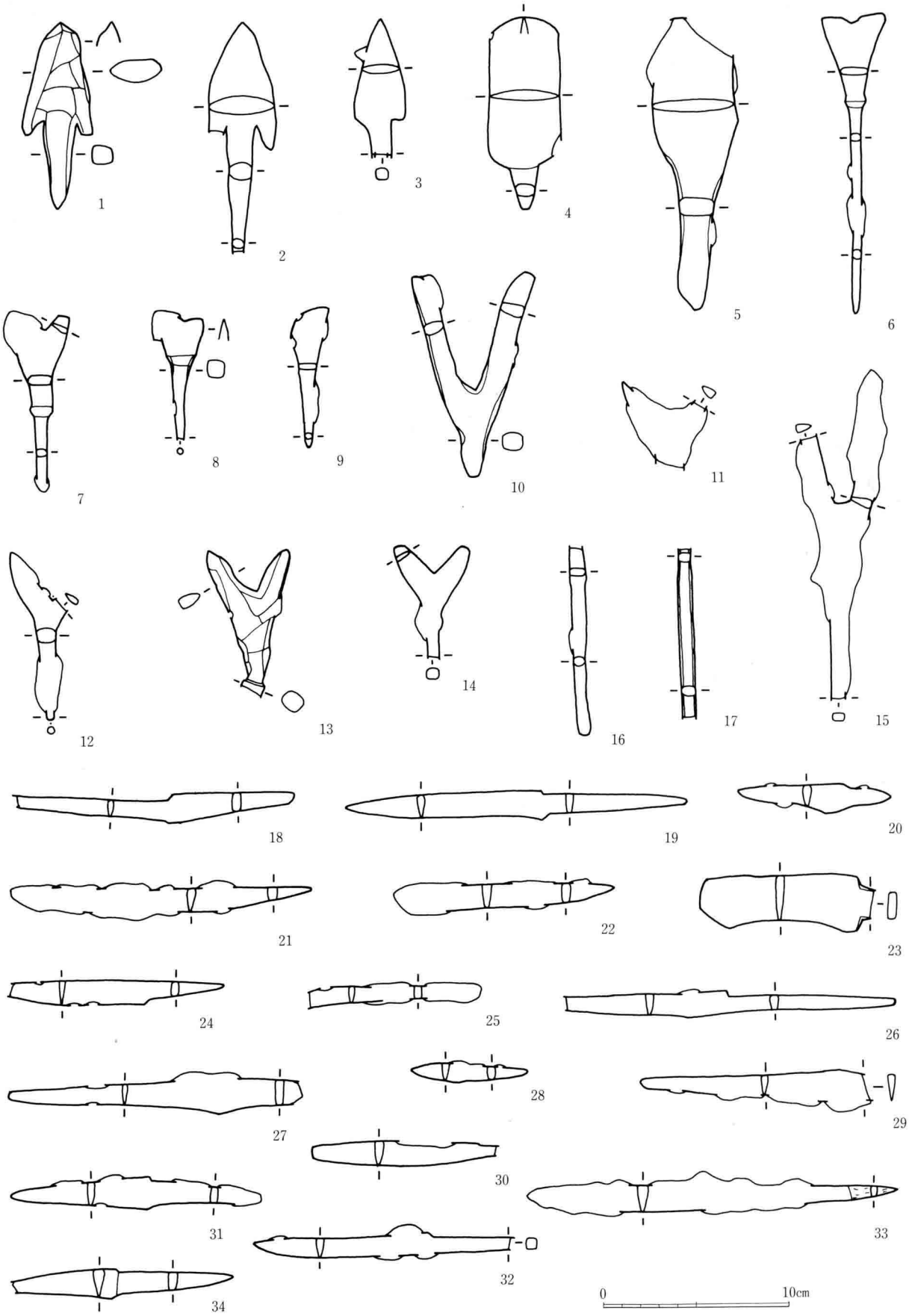
(5)　滑石製紡錘車（283図17～19）・不明製品（16）

滑石製品は４個認められるにすぎない。16はＦＳＢ45（10期）からの出土であるが、ほぼ全面にわたって研磨されるものの、製品なのか未成品なのか不明である。

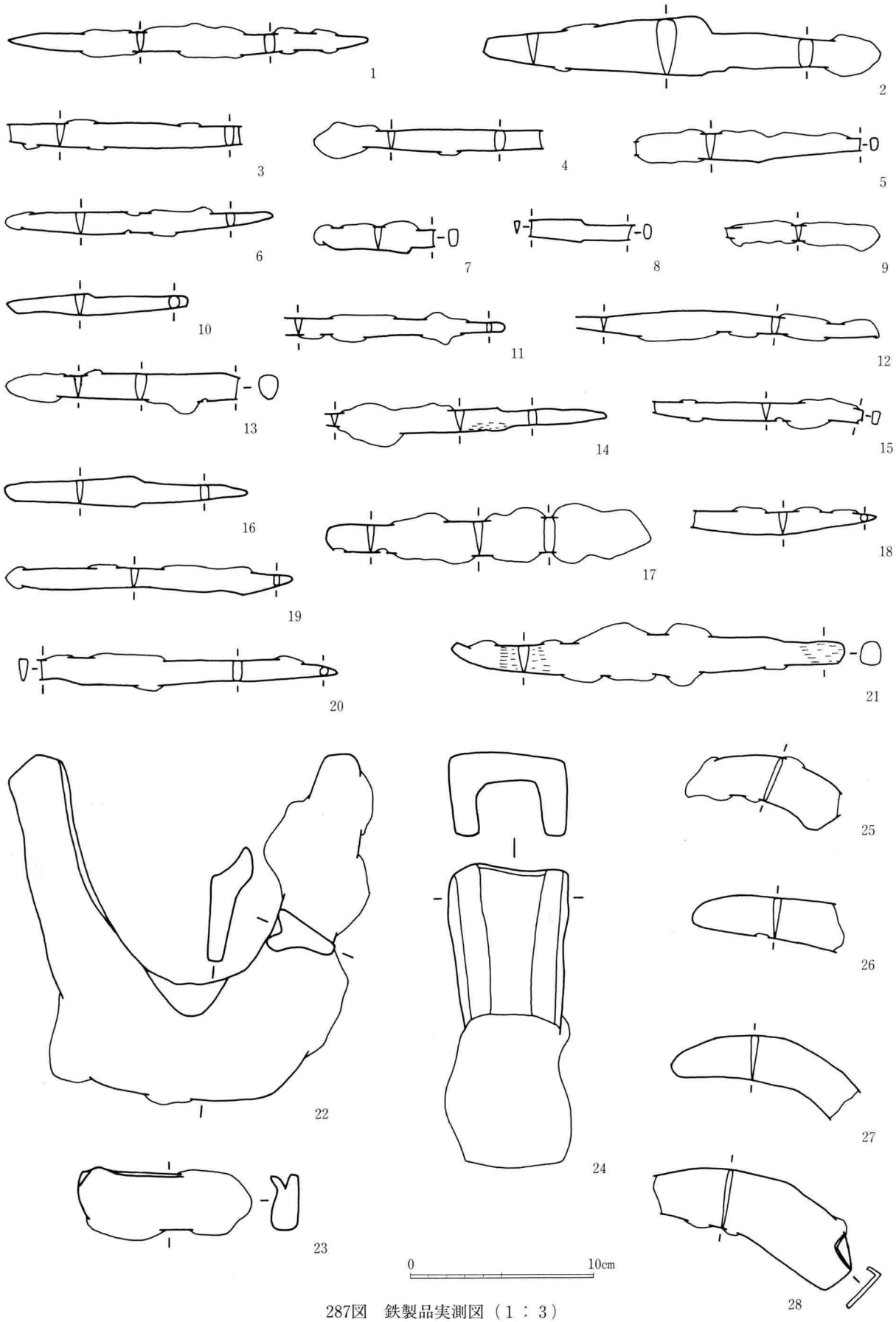
番号	遺　構	断面形状	法　量　(cm)				重量（g）	備　　考
			長径	短径	厚	軸芯径		
17	ＢＳＢ19	偏平楕円形	4.3	2.8	2.0	0.95	42.2	上下左右対象形、10期
18	ＨＳＢ47	隅丸台形	4.9	2.3	1.8	0.8	57.0	軸芯傾斜、10期
19	ＥＳＢ39	隅丸台形	3.8	2.2	2.3	0.6	29.0	上面研磨痕、９期



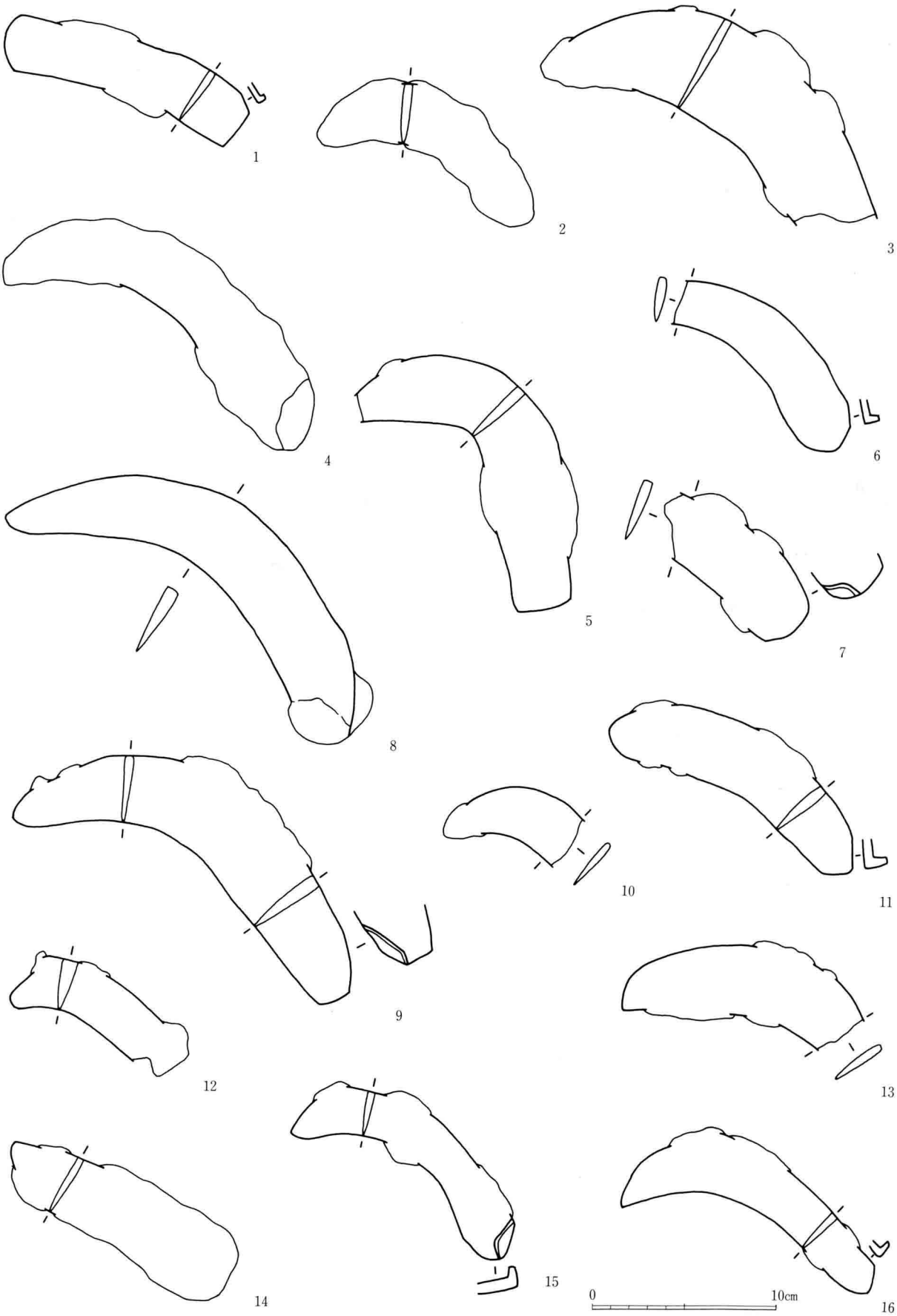
285図　銅製品（1）・鉄製品（2～32）実測図（1：3）



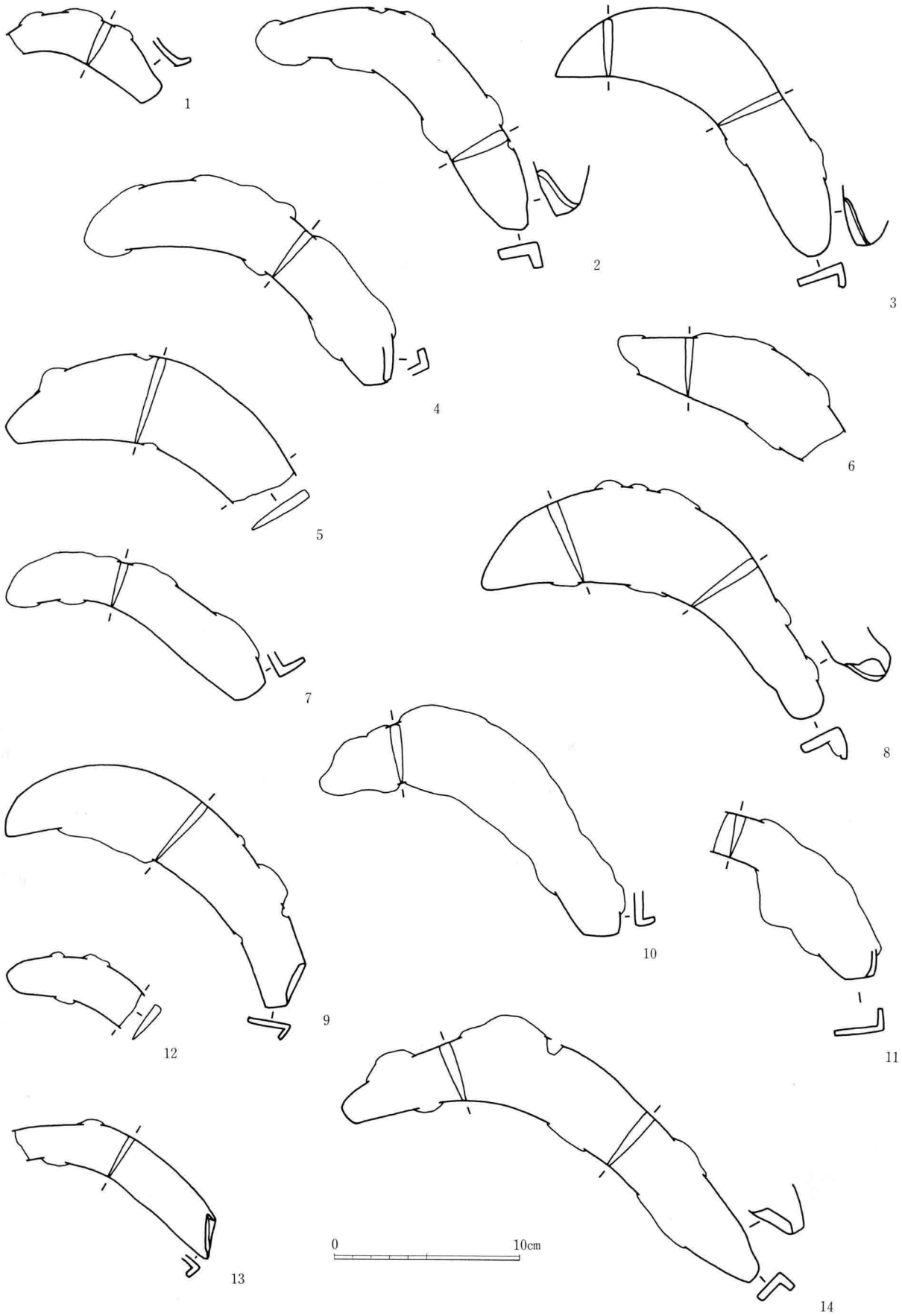
286図　鉄製品実測図（1：3）



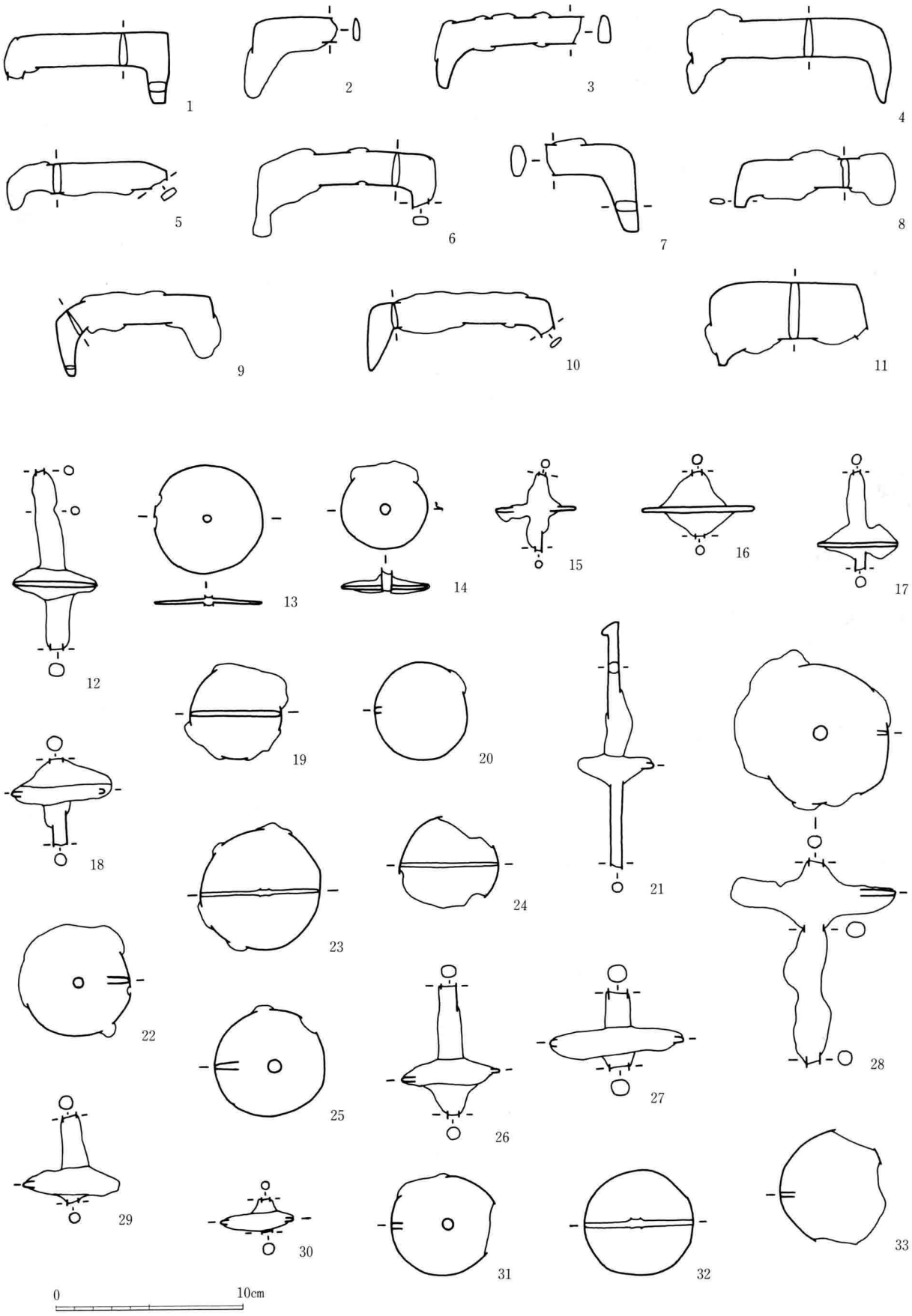
287図　鉄製品実測図（1：3）



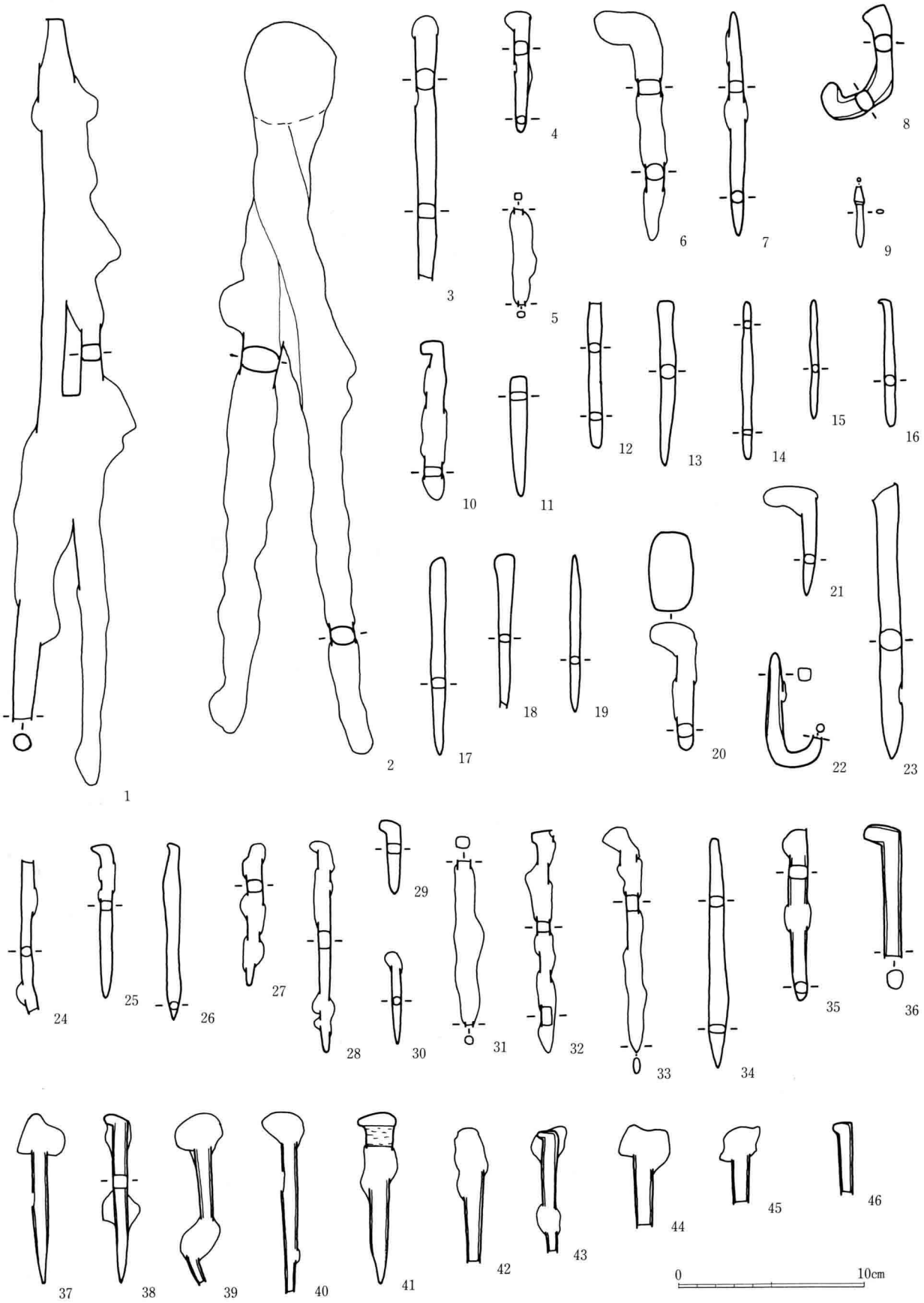
288図　鉄製品実測図（1：3）



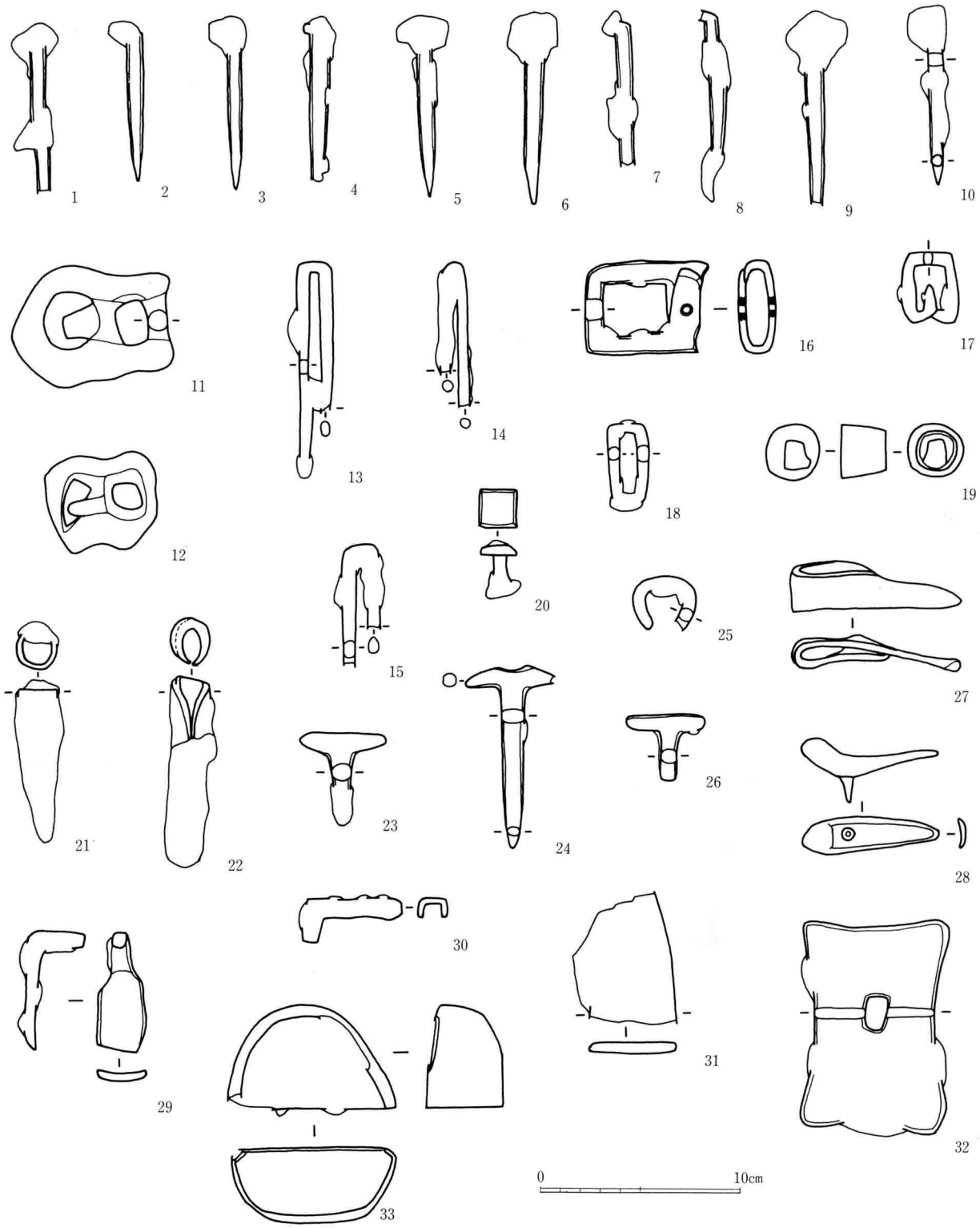
289図　鉄製品実測図（1：3）



290図　鉄製品実測図（1：3）



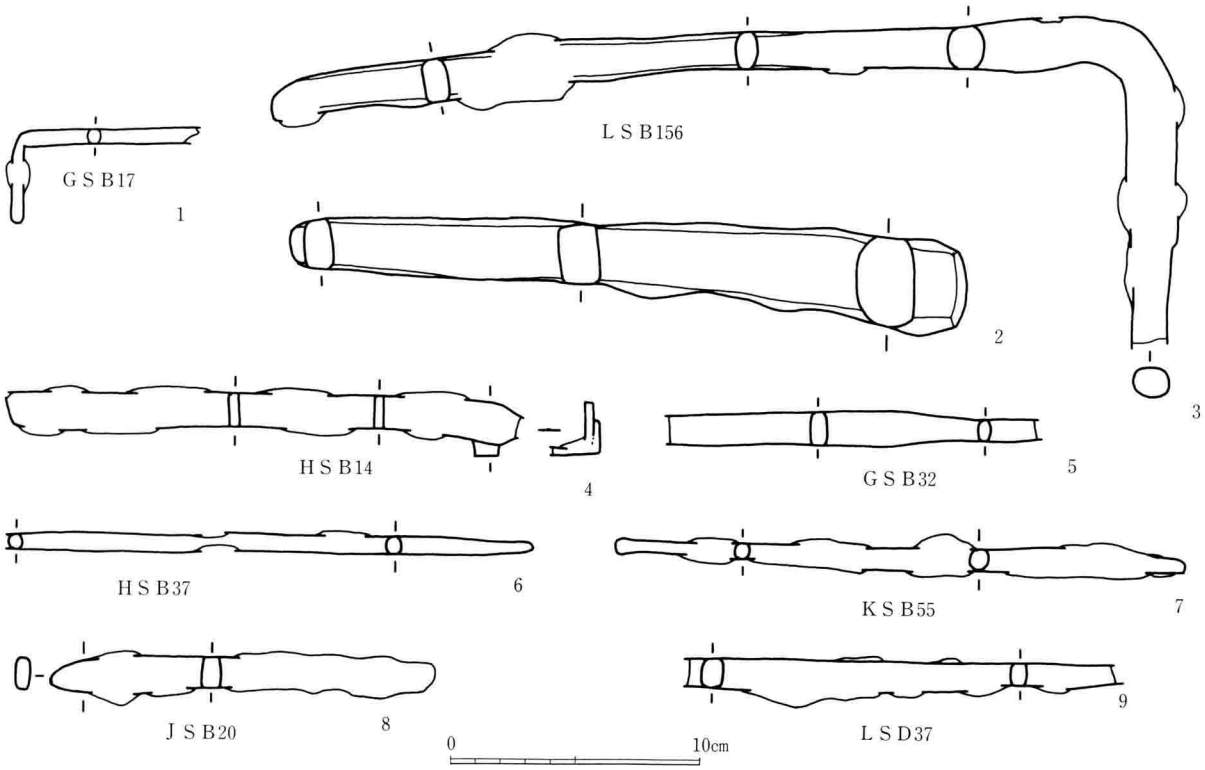
291図　鉄製品実測図（1：3）



292図　鉄製品実測図（１：３）

8　鹿角製品・鉄製品

鹿角製品（283図15）は針またはピンと思われる棒状の製品がＫＳＢ41（10期）から１点出土している。断面形状は0.55cmの円形を呈し、縦方向のケズリと研磨で仕上げる。



293図　鉄製品実測図（１：３）

鉄製品（285～293図）

何らかの鉄製品の出土している住居址（294図）はⅠ遺構群では279軒のうち142軒で出土率51％、Ⅱ遺構群では176軒のうち115軒で65％、Ⅲ遺構群では108軒のうち32軒で30％、Ⅳ遺構群では81軒のうち46軒で57％、Ⅴ遺構群では92軒のうち61軒で66％、Ⅵ遺構群では107軒のうち41軒で38％、Ⅶ遺構群では171軒のうち67軒で39％の数値になる。Ⅱ遺構群周辺が高い出土率を示している。平均すると報告書に掲載の総住居址数1014軒のうち504軒から鉄製品が出土しており、２軒に１軒の割合で出土していることになる。砥石の出土量も多く、また鎌を除き農具類の出土量が少ない点と羽口・鉄滓が出土している小鍛冶址が多く確認されていることから、本来の保有率はもっと高いものと推定する。出土品は土を付着した錆が著しく、また芯が膨脹しているものが多く、本来の形態を示しているものは少ない。したがって断面形態においては両端の形態から推定実測してあるものが多いことをお断りしておく。

(1)　羽釜（285図２）

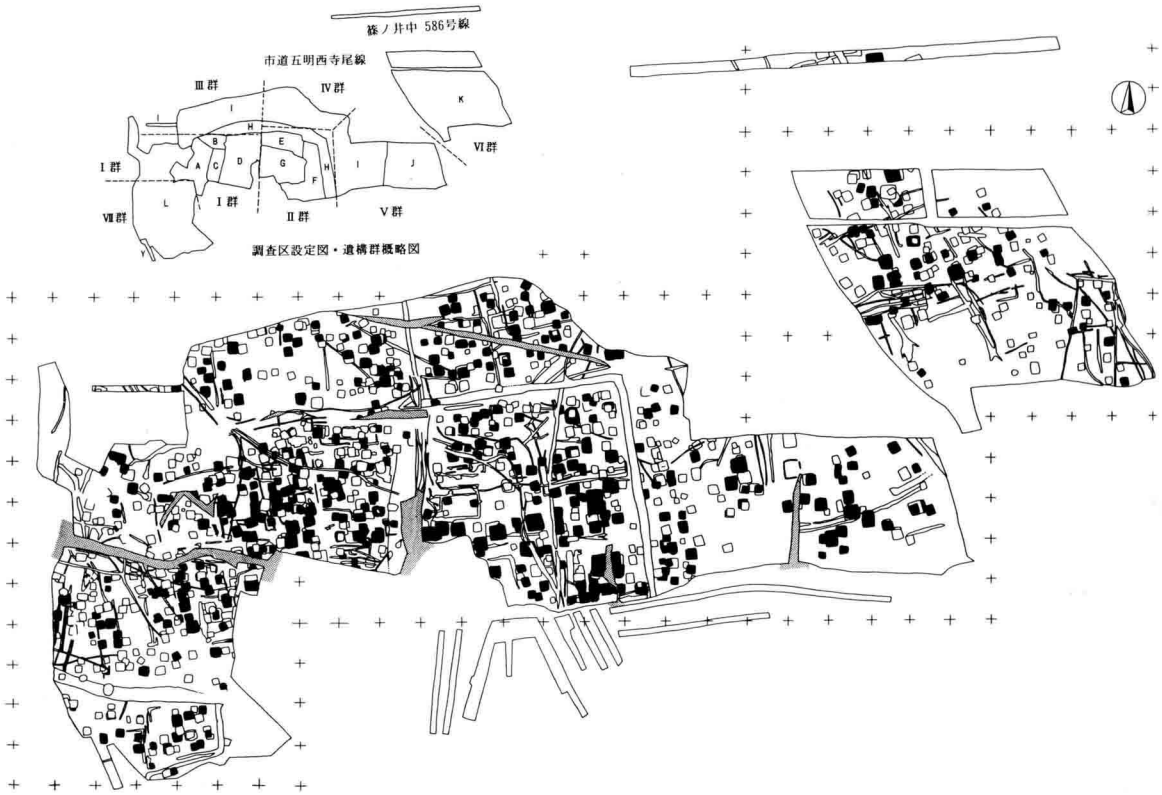
いわゆる鉄釜を想定させるもので、内弯気味の体部に長方形状の鍔が一周するものと思われる。Ⅴ遺構群のＩＳＢ216・221（10期）から破片で各１点出土してしている。この遺構は隣接しており、どちらかの住居址で使われていた可能性がある。

(2)　火打金具（285図３～５）

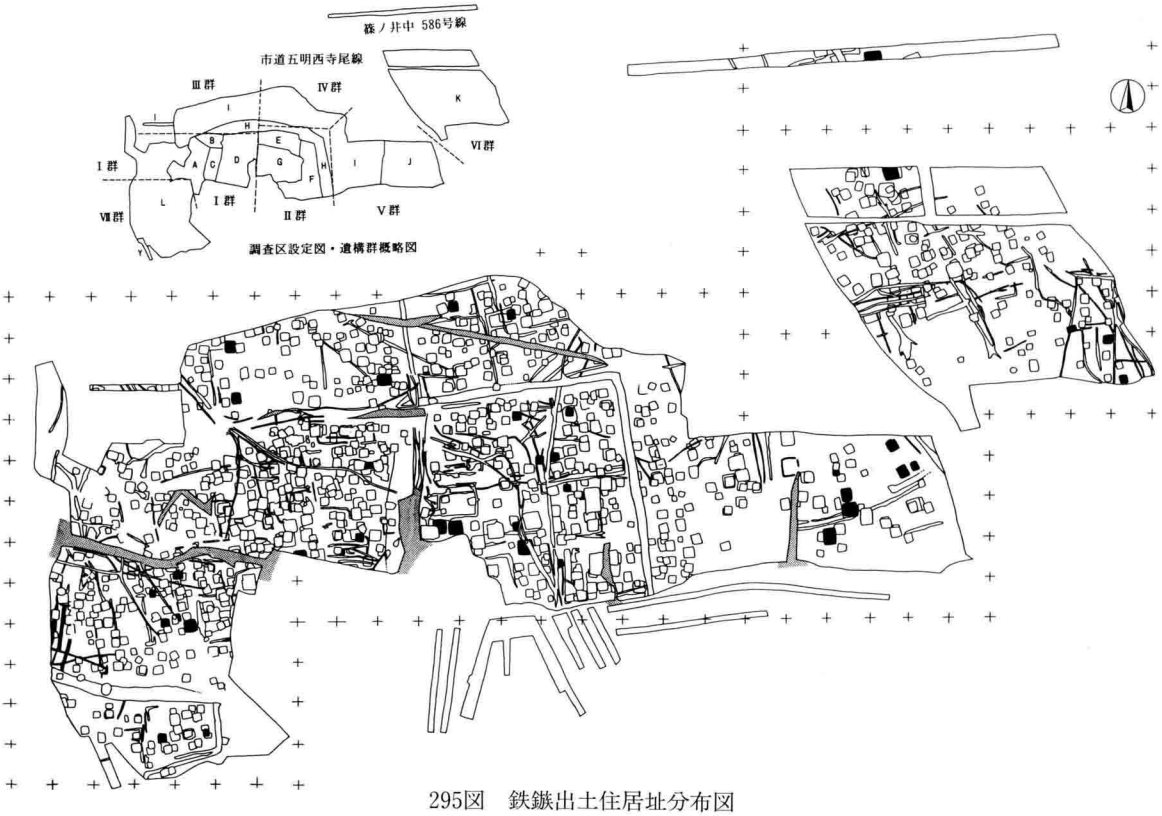
火打面が平坦で厚く、握柄差込部が細くなる特色がある。出土品からは３個３形態のものを発火の用途と推定した。３はＡＳＢ５（13期）から出土し、三角形状を呈する。４はＧＳＢ34（９期）から出土し、３の形態で両端が折れ曲がる。５は長紡錘形を呈し、ＤＳＢ31（10期）からの出土である。ただし、これと用途を共にする石英類の火打石が確認されていない。

(3) 鉄鏃（285図６～32、286図１～15）

39軒の住居址、４基の土坑、３条の溝址から出土しており、Ⅱ遺構群とⅤ遺構群に集中している傾向にある。形態は４類に大別することができ、さらに各形態は数種に細別される。



294図　鉄製品出土住居址分布図



295図　鉄鏃出土住居址分布図

Ⅰ類（286図１～３）　身部の平面形態が三角形で、逆刺のあるもの（１・２）と角状のもの（３）がある。１は鍛造である。１－ＤＳＢ60（10期）、２－ＫＳＢ102（12期）、３－ＬＳＢ78（９期）。

Ⅱ類（286図４・５）　身部先端が鑿状を呈するもので、平面形態が小判状のもの（４）と圭頭状のもの（５）の２種がある。４－ＬＳＢ118（13期前後）、５－ＬＳＢ156（13期）。

Ⅲ類（285図６～32）　身部平面形態が長三角形または柳葉上を呈するもので、逆刺のあるもの（13）・角状のもの（12・14・17・19・22・30）・撥状のもの（８・10・15・20・21・24・26・27・31・32）の３種ある。６－ＤＳＢ８（12期）、７－ＥＳＢ１（10期）、８－ＥＳＢ22（９期）、９－ＦＳＢ45（10期）、10－ＦＳＢ48（12期）、11－ＧＳＢ24（９期）、12－ＧＳＢ34（９期）、13－ＨＳＢ７（12期）、14－ＨＳＢ43（10期）、15－ＩＳＢ27（９期）、16－ＩＳＢ33（９期）、17－ＩＳＢ５、18－ＩＳＢ248（10期）、19－ＪＳＢ１、（10期）20－ＪＳＢ－３（13期）、21－ＪＳＢ17（10期）、22－ＪＳＢ16（10期）、23－ＪＳＢ32（10期）、24－ＪＳＢ26（13期）、25－ＬＳＤ37（９～10期）、26－ＬＳＫ71、27－ＬＳＢ78（９期）、28－ＬＳＢ90（10期）、29－ＬＳＢ84（８期前）、30－ＬＳＢ123（10期）、31－ＬＳＢ156（13期）、32－ＬＳＢ78（９期）。

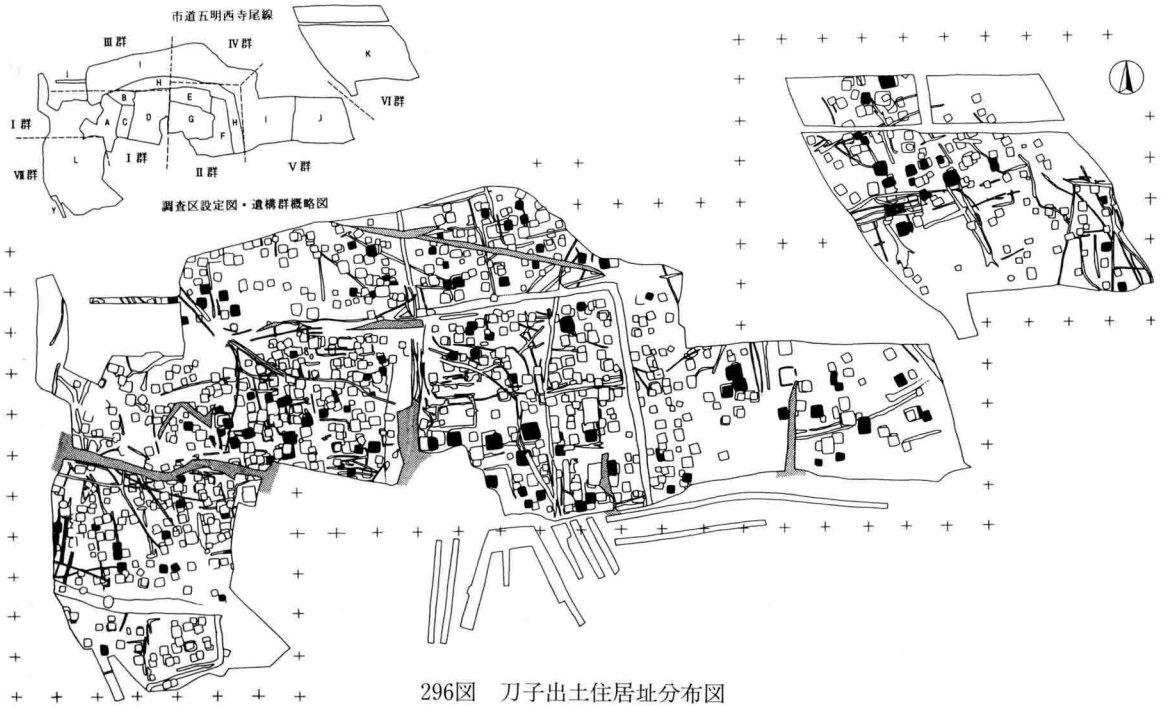
Ⅳ類（286図６～８・10～15）　いわゆる雁股鏃である。身部形態が逆三角形を呈し、刃部先端が平坦に近いもの（６～８）、刃部が短く開くもの（11・12～14）、刃部が大きく外開するもの（10・15）の３種がみられる。６・７－ＧＳＢ27（９期）、８－ＫＳＢ92（11期）、10－ＪＳＢ34（10期）、11－ＫＳＢ55（９期）、12－ＫＳＢ99、13－ＤＳＢ15（10期）、14－ＪＳＢ33（11期）、15－ＩＳＢ163（12期）。

Ⅴ類（286図９）　いわゆる片刃鏃がＩＳＢ１（11～13期）から１点出土している。

16・17は紡錘車と共伴しないことから鉄鏃の茎部と推定される。16－ＧＳＢ29（７期後半）、17－ＩＳＫ32。

(4)　刀子（286図18～34、287図１～21）

刀子および刀子と推定されるものは125軒の住居址、11基の土坑、６条の溝址から出土している。破損や錆のため全形を知るものは少ない。身部は平棟か丸棟か定かでない。刃部と茎部がなだらかな関状になるものがあるが研ぎ減りによるものと思われる。また、内反になる刃部も研ぎ減りによるものであろう。茎部断面は隅丸長方形状を呈し、直線的に減幅して先端が尖る。



296図　刀子出土住居址分布図

図－番号	刃部	関	法量（cm）			遺　構	備　考	図－番号	刃部	関	法量（cm）			遺　構	備　考
			全長	身	茎						全長	身	茎		
286－18	外反	逆棟関			6.7	ＡＳＢ20	９期前	－３	外反	無				ＩＳＢ230	10期
－19	内反	両　関	18.4	10.5	7.9	ＤＳＢ34	９期	－４	外反	無				ＩＳＢ250	10期
－20	内反	両　関	8.3	5.7	2.6	ＤＳＢ81	９期前	－５	内反	無				ＩＳＢ255	９期
－21	外反	無	16.1			ＡＳＢ５	13期	－６	外反	無	14.6			ＩＳＢ262	10期
－22	内反	無	13.4			ＤＳＢ67	９期	－７	内反	刃　関		4.9		ＪＳＢ１	10期
－23	内反	両　関		8.5		ＤＳＢ60	10期	－８	内反	両　関				ＪＳＢ24	10期
－24	外反	刃　関			2.7	ＤＳＢ18	８～９期	－９	内反	無				ＪＳＢ24	10期
－25	内反	無				Ｄ検出面		－10	内反	棟　関	9.9	5.0	4.9	ＪＳＢ34	10期
－26	外反	棟　関			6.1	ＦＳＢ40	10期	－11	内反	無				ＪＳＫ86	
－27	内反	無		7.5		ＦＳＢ57	９期	－12	内反	無				ＫＳＢ99	
－28	外反	無	6.3			ＧＳＢ３	９期	－13	直線	無				ＪＳＢ34	10期
－29	外反					ＩＳＢ34	９期後	－14	直線	棟　関			5.9	ＫＳＢ25	９期
－30	外反	棟関？		8.9		ＩＳＢ145	12期	－15	外反	無				ＫＳＢ110	10期
－31	直線	両　関	13.5	7.4	6.1	ＩＳＢ67	９期	－16	内反	両　関	13.3	7.3	6.0	ＬＳＤ37	９～10期
－32	外反	棟　関		9.4		ＩＳＢ89	９期	－17	直線		17.6			ＫＳＪ１	副葬品
－33	外反		20.0			ＩＳＢ163	12期	－18	外反	無				ＬＳＢ154	10期
－34	内反	両　関			6.2	ＩＳＢ145	12期	－19	内反	無	15.7			ＬＳＤ28	
287－１	直線		19.8			ＩＳＢ182	８期	－20	内反	無				ＬＳＢ120	９期前後
－２	外反	棟　関	21.6	12.0	9.6	ＩＳＢ221	10期	－21	外反		21.5			ＬＳＢ105	11～14期

(5)　鋤先（287図22・23）

ＧＳＢ10（14期、22）・ＫＳＢ27（９期、23）・ＧＳＢ10（14期）・ＬＳＢ39（12期）から計４点出土している。22は刃部が平坦で、耳部がＶ字形に外開するがＵ字鋤先の範疇に入るものであろう。刃部は幅広で横幅の刃先が10cm・縦幅6.1cm・厚さ0.4～2.2cmを測る。鋤受袋部は錆のため欠損しているのか、もともと作られなっかたのか定かでないが出土時では確認されない。耳部は浅いＶ字状の袋部を形成し、断面幅が3.2cm・厚さ0.3～2.1cmで、上端付近の最大幅が19.7cmを測る。23は小型で耳部を有しない点を考慮すれば鍬先の可能性が高い。横幅9.6cm・縦幅2.9cm・厚さ1.1～1.4cmの大きさで、袋部には木質部が残存する。

(6)　斧（287図24）

斧と推定される鉄塊がＩＳＢ14（９～12期、24）・ＩＳＢ14（10期後）・ＩＳＢ103（10期）・ＩＳＢ234（10期）・ＩＳＢ248（10期）・ＬＳＢ39（12期）・ＬＳＫ69から計７点出土している。24は縦斧で、袋部がコの字形を呈するが、刃部は鉄塊化していて形態は不明である。袋部上端の幅は5.5cmになる。

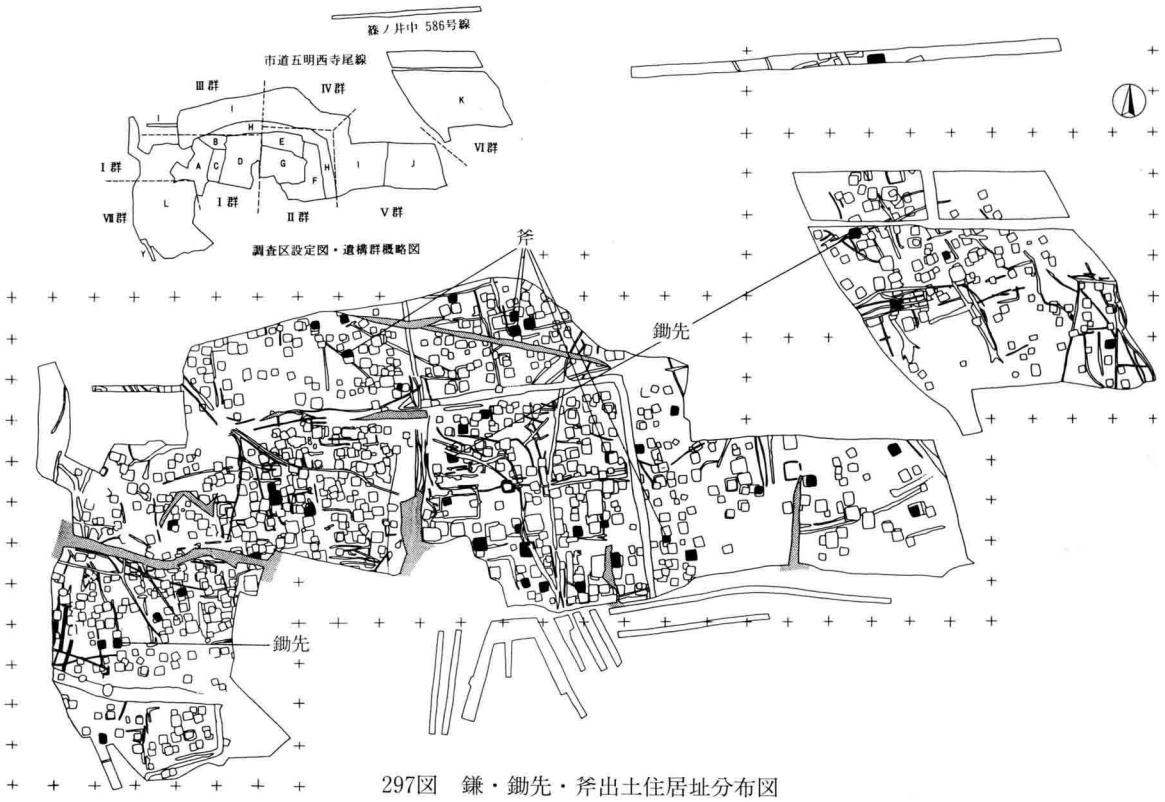
(7)　鎌（287図25～28、288図１～16、289図１～14）

39軒の住居址、２条の溝址から出土している。錆の付着が著しく全形態を知り得るものは少ない。大きさから10cm未満の小型、15cm未満の中型、10cm以上の大形のものに分類できる。中・大型のものは刈り払いの用途が考えられるが、小型のものは摘み鎌の用途が加味されよう。形態は基部から刃部に弧を描いて接続するのが一般的であるが、288図５のように刃部と基部が明瞭に分離できる形態もある。289図10・14等の形態はその中間に位置する。288図12は刃部の先端が三角形状を呈し、棟部が厚く、折返し部の存在が不明であることを考慮すれば鉈の用途が考えられる。刃部形態の差は半月形から研ぎ減りにより三日月形態への変遷の結果と考える。基部の柄装着用の折返し部は刃部先端を右にすると裏面のものが多い点本遺跡の特色である。

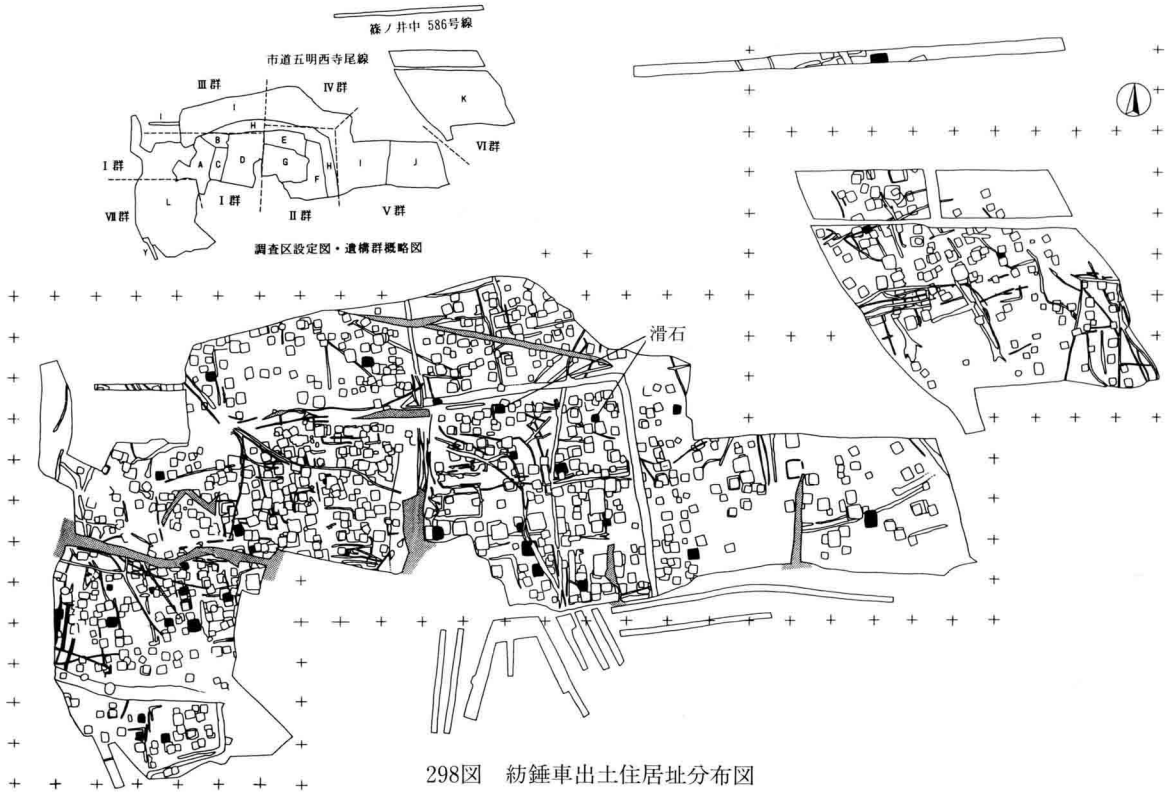
図－番号	刃部形態	刃先形	法量 (cm)			折返し				遺構	時期
			全長	刃部幅	基部幅	位置	形状	長	高		
287－25	三日月形	嘴状	9.4	3.5	3.8	上隅		(2.3)		ＡＳＢ21	9期
－26	三日月形	丸味		2.2						ＡＳＢ48	7期後半
－27	三日月形	丸味		3.4						ＡＳＢ48	7期後半
－28	三日月形			3.3	2.4	表上隅	三角形	2.0	0.8	ＡＳＢ22	
288－1	隅丸長方形	隅丸	12.2	3.1	3.1	裏上隅	三角形	1.3	0.5	ＡＳＢ63	7期後
－2	三日月形	嘴状	(11.2)	3.2	(2.9)	裏？				ＡＳＢ57	7期後半
－3	三日月形	嘴状		5.5	(4.2)					ＡＳＢ63	7期後
－4	三日月形	丸味	(17.8)	(3.2)	(4.2)	表		(4.2)		ＡＳＢ12	8期
－5	半月形	嘴状	(14.4)	3.7	3.2					ＣＳＢ9	13期
－6	三日月形			2.4	3.4	裏上端		1.4	0.8	ＤＳＢ18	8～9期
－7				2.1	3.6	裏上隅	三角形	1.3	0.6	ＦＳＢ33	10期
－8	三日月形	嘴状	19.5	4.0	(2.5)	裏？				ＤＳＢ59	9期
－9	三日月形	嘴状	19.0	3.9	3.6	裏上端	三角形	3.5	1.2	ＦＳＢ33	10期
－10	三日月形	嘴状		3.0						ＦＳＢ48	12期
－11	隅丸長方形	丸味	12.7	3.7	2.6	裏上隅	三角形	1.5	1.3	ＧＳＢ27	9期
－12	鉈形	丸味	(9.0)	2.7	2.7					ＩＳＥ38	9期
－13	半月形	嘴状		3.8						ＧＳＢ33	9期
－14	三角形	丸味	(13.6)	3.3	(4.4)					ＩＳＢ163	12期
－15	半月形	嘴状	12.4	2.5	2.7	表上隅	三角形	2.2	1.2	ＩＳＢ195	10～12期
－16	三日月形	嘴状	14.2	3.2	(2.6)	裏先端	長方形	1.6	1.0	ＩＳＢ146	11期
289－1	三日月形		(8.0)	2.1	2.2	裏上端			0.8	ＩＳＢ241	10期
－2	三日月形		(15.7)	3.3	2.5	裏上端	長方形	2.5	1.5	ＩＳＢ249	10期
－3	半月形	嘴状	16.0	4.3	3.2	裏上端	長方形	2.7	1.4	ＩＳＢ3	9～12期
－4	三日月形		(16.0)	3.5	(3.2)	表上端	長方形		1.2	ＩＳＢ24	9～12期
－5	半月形	平坦		4.8	(3.5)					ＩＳＢ148	14期
－6	三日月形			2.7						ＪＳＢ6	10期
－7	三日月形		(7.8)	2.4	3.1	裏上端			1.9	ＫＳＢ46	11期
－8	半月形	嘴状	(13.2)	5.2	2.7	裏上隅	三角形	2.0	1.8	ＪＳＢ32	9期
－9	三日月形	嘴状	17.0	4.1	2.8	裏上隅	台形	2.3	0.9	ＫＳＢ99	
－10	三日月形	嘴状	10.5	4.4	(2.0)	裏上端			1.1	ＫＳＢ9	
－11				2.4		表上隅			1.2	ＫＳＤ6	
－12	三日月形	丸味		2.4						ＬＳＢ33	13期
－13	三日月形			1.6	1.5	表先端	三角形	1.4	0.6	ＬＳＢ130	10期前
－14	三日月形	丸味	23.2	4.2	2.8	裏上端	台形	1.8	1.3	ＬＳＢ154	10期

(8) 苧引金具（290図１～11）

形態はカスガイ状を呈し、身部上端に刃部を形成し、握柄差込部は三角形になる特色がある。錆が進行しており、３・７の身部の膨脹が著しい。12軒の住居址、２基の土坑、１条の溝址から出土しているが、各遺構群に散在的な分布を示す。



297図　鎌・鋤先・斧出土住居址分布図



298図　紡錘車出土住居址分布図

番号	肩部	法量 (cm)			遺構	時期	番号	肩部	法量 (cm)			遺構	時期
		横幅	縦幅	身幅					横幅	縦幅	身幅		
1	直角	8.9	3.9	1.8	ASB17	15期	7	鈍角		4.8	1.7	JSB1	10期
2	直角			1.4	DSB12	9期	8	鈍角	(8.7)	2.6	1.6	KSB64	9期
3	鈍角		3.6	1.4	GSB25	8期	9	鋭角	8.5	4.1	1.4	LSB26	12期
4	鈍角	(10.7)	4.5	2.1	ISB84	10期	10	鈍角	9.9	3.7	1.5	LSB161	8期
5	鋭角		2.4	1.5	ISD71		11	鋭角		4.2	2.9	LSB201	
6	鈍角	(9.0)	3.9	1.9	ISB249	10期							

(9) 紡錘車（290図12～33）

錆による土砂の付着が著しく全形態を知り得るものは少ない。34軒の住居址、２基の土坑、１条の溝址から出土しており、II遺構群とVII遺構群に集中する。形態は円盤状の弾み車の中央に軸芯棒を嵌入させたものであるが、錆のため軸芯棒の痕跡がみられないものもある。軸芯棒の断面形態は円形から隅丸方形状を呈し、21の先端は嘴状になる。鉄製品の他に滑石製のものが３個出土していることは特殊遺物の項で記述した。

番号	弾み車 (cm)		軸芯棒(cm)	遺構	時期	番号	弾み車 (cm)		軸芯棒(cm)	遺構	時期
	直径	厚	断面径				直径	厚	断面径		
12	4.6	0.5	0.5～0.8	DSB47	10期前	23	6.4	0.2	0.6	LSB26	12期
13	5.9	0.3	0.4	DSB63	10期	24	5.4	0.2		LSB26	12期
14	4.7	0.2	0.4～0.6	ESB3	9期	25	(6.1)	0.3	0.8	LSB79	10期前
15	4.4	0.2	0.4	FSB45	10期	26	5.4	0.3	0.8	LSB100	10期後
16	6.0	0.3	0.6	FSB10	9期	27	7.2	0.4	1.0	LSB154	10期
17	4.6	0.2	0.5～0.6	FSB45	10期	28	(8.8)	0.3	0.8～1.1	KSB54	9期
18	5.1	0.3	0.6～0.8	ISB84	10期	29	(5.2)	0.4	0.6～0.8	LSB78	9期
19	4.9	0.3		ISB261	11期	30	3.9	0.3	0.6	LSB156	13期
20	(4.9)	0.3		JSB21	12期	31	(6.2)	0.3	0.7	LSB177	7期後半
21	(4.1)	0.3	0.5～0.7	JSK79		32	6.0	0.4	(0.7)	LSB156	13期
22	(5.9)	0.4	0.6	KSB21	8～9期	33		0.2		LSB185	

(10) 金鉗（291図１・２）

１はESK11（９期）、２はJSK87（時期不明）からの出土で、羽口や鉄滓等の小鍛冶遺物を伴わずに単独出土である。しかし、ESK11はSB24・SD15と重複関係にあるが小鍛冶遺構は存在しないものの、JSK87は76～78・83号の大型土坑群の一角に位置し、これらの土坑には羽口と鉄滓が共伴しているものがあり、小鍛冶遺構に関与しているものと考えられる。１は全長41.2cm、２は39.5cmを推測する。

(11) 釘・釘状製品（291図３～46、297図１～10）

先端が尖り、物と物を接着する機能を有すると推定されるものをいう。打面を形成する有頭のものの基部断面は上方では長方形・隅丸方形を呈し、下方・扇端部では円形に近いものが多く見受けられ、無頭で棒状のものは全体に円形・楕円形のものが多い。なおKSJ１出土の291図37～46・292図１～９は有頭角釘で木棺に用いられたものと考えられ、頭部を除き錆の進行が少なく、他のものと異質である。後出のものであろう。

図番号	頭部	全長(cm)	遺　構	時　期	図番号	頭部	全長(cm)	遺　構	時　期	図番号	頭部	全長(cm)	遺　構	時　期
291－3	無		ＡＳＢ29	12期	－21	有	5.9	ＩＳＢ19	10期	－39	有		ＫＳＪ１	
－4	有	6.4	ＡＳＢ36	8期	－22	無		ＪＳＢ４	13期	－40	有		ＫＳＪ１	
－5			ＤＳＢ11	10期	－23	有？		G検出面		－41	有	9.4	ＫＳＪ１	
－6	有	12.4	ＤＳＢ90	10期	－24			ＪＳＢ４	13期	－42	有		ＫＳＪ１	
－7	無	12.1	ＤＳＢ34	9期	－25	有	8.2	ＪＳＢ８	11期	－43	有		ＫＳＪ１	
－8	?		ＤＳＢ47	10期前	－26	有	9.5	ＪＳＢ27	13期	－44	有		ＫＳＪ１	
－9	有	3.3	ＥＳＫ11	9期	－27	無	7.8	ＪＳＢ26	13期	－45	有		ＫＳＪ１	
－10	有	8.6	ＧＳＢ１	10期	－28	有	11.5	ＪＳＢ33	11期	－46	有		ＫＳＪ１	
－11	無	6.5	ＧＳＢ17	9期	291－29	有	4.0	ＪＳＢ27	13期	292－1	有		ＫＳＪ１	
－12			ＧＳＢ２	9期	－30	有	5.0	ＫＳＢ86	9期	－2	有	(7.9)	ＫＳＪ１	
－13	無	8.9	ＧＳＢ２	9期	－31			ＫＳＢ26	7期後半~8期	－3	有	(8.2)	ＫＳＪ１	
－14	無	8.5	ＧＳＢ17	9期	－32	有	12.1	ＫＳＢ67	10期	－4	有		ＫＳＪ１	
－15	無	6.4	ＧＳＢ１	10期	－33	有	12.2	ＫＳＢ67	10期	－5	有	(8.5)	ＫＳＪ１	
－16	有	6.8	ＦＳＢ５	10期	－34	無？	(12.5)	ＫＳＢ94		－6	有	(9.0)	ＫＳＪ１	
－17	無	10.5	ＧＳＢ27	9期	－35			ＬＳＢ26	12期	－7	有		ＫＳＪ１	
－18	?		ＧＳＢ21	9期	－36	有		ＬＳＢ156	13期	－8	有		ＫＳＪ１	
－19	無	8.5	ＨＳＢ17	8期前	－37	有	(8.5)	ＫＳＪ１		－9	有		ＫＳＪ１	
－20	有	7.0	ＩＳＢ182	8期	－38	有	9.0	ＫＳＪ１		－10	有	8.7	ＫＳＢ67	10期

⑿毛抜き形製品（292図13～15）

13－ＦＳＢ５（10期）、14－ＧＳＢ12（10期）、15－ＪＳＢ34（10期）。

⒀環状金具（292図16～19・25・27）

16･19は挿入する飾り金具と推定され、他は締め金具の一種であろう。16－ＫＳＢ12(10期)、17－ＧＳＢ28(12期)、18－ＫＳＢ12（10期）、19－ＧＳＢ25（８期）、25－ＫＳＢ12（10期）、27－ＪＳＢ34（10期）。

⒁　石突き形製品（292図21・22）

袋状の差込み口を有するもので、２点出土している。21の全長は7.6cm、22は9.5cmを測る。21－ＩＳＢ195(10～12期)、22－ＩＳＢ191（12～13期）。

⒂　留め金具（292図20・23～26・28・29）

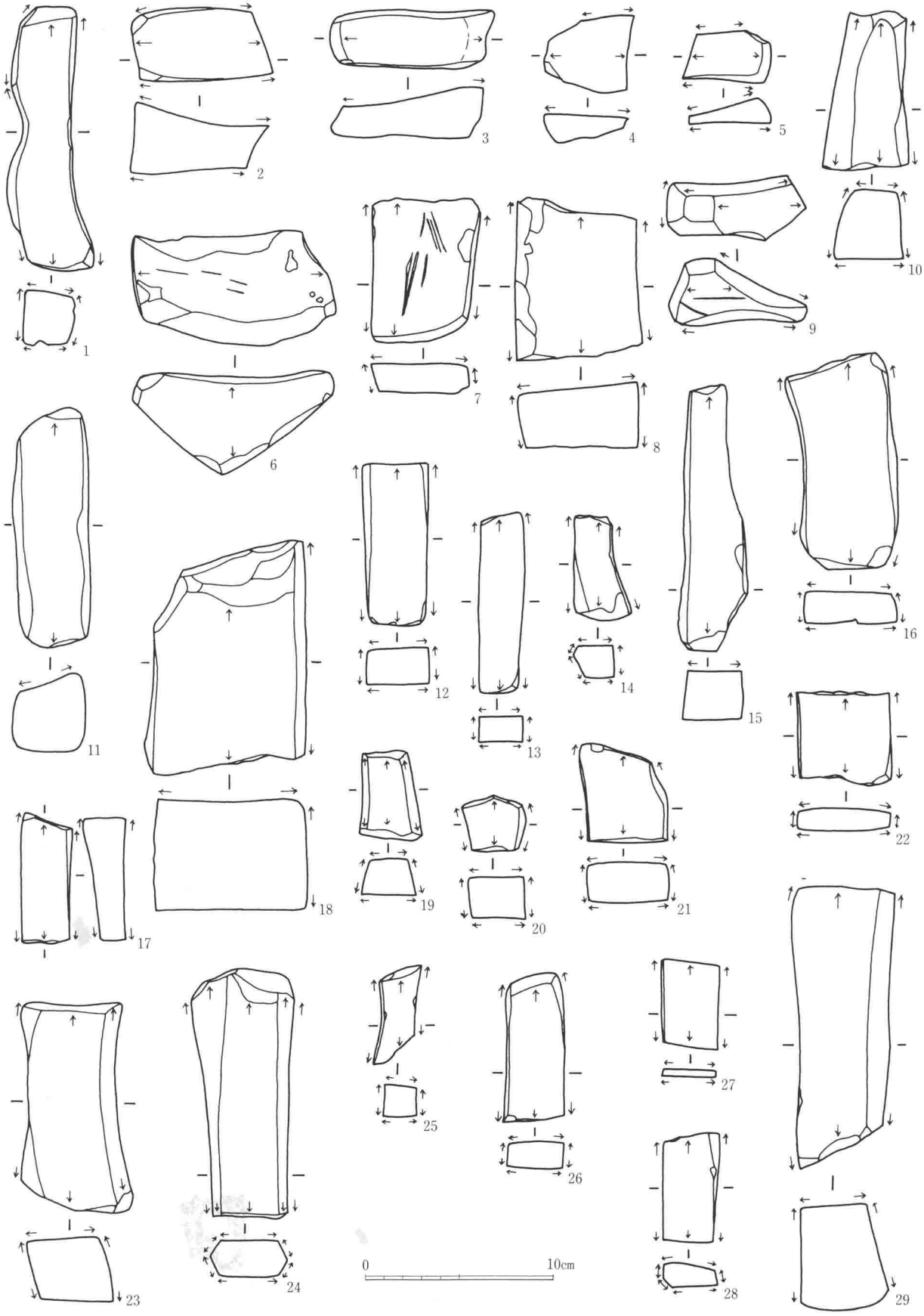
20は鋲としての使用が考えられ、23～26はＴ字形を呈する釘と思われる。28・29の断面形は凹面状になり、28には鋲が付いていることから、共に飾り金具だろう。20－ＩＳＫ５、23－ＪＳＢ16(10期)、24－ＬＳＢ126(13～14期)、25－ＬＳＥ８、28・29－ＩＳＤ26。

⒃　不明製品（292図30～33）

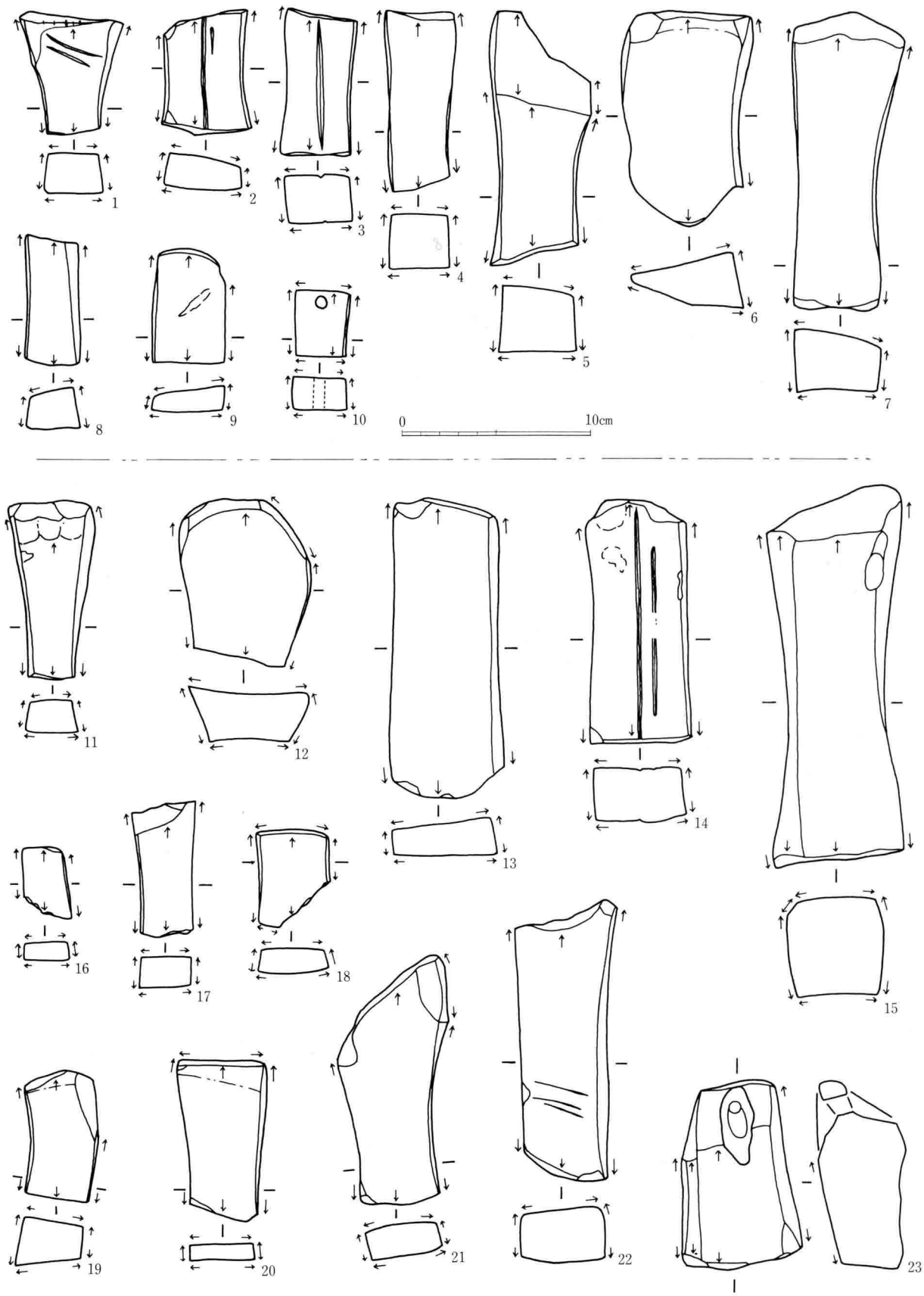
30はＵ字形の装飾用金具と思われる。31・32は鉄板状の製品で、32の形態は四隅突出長方形を呈し、長方形の孔がある。34は偏平半球形で、形態から木製鐙の先端部の装飾金具を想定する。縦5.2cm・横8.5cm・高さ3.9cmの法量である。30－ＧＳＢ34（９期）、31－ＬＳＢ156（13期）、32－ＥＳＢ27（10期）、33－Ｇ検出面。

⒄　棒状製品（293図１～９）

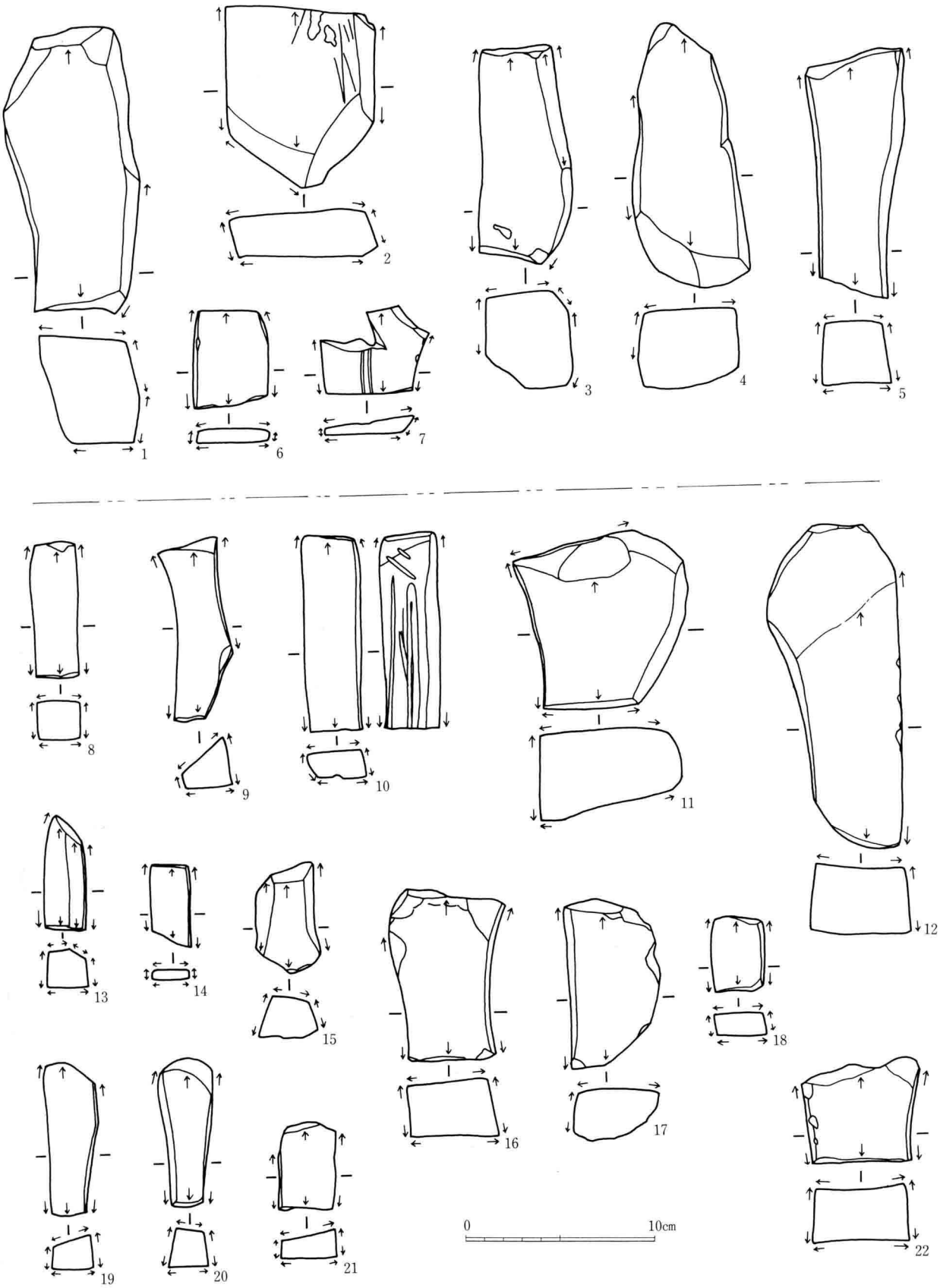
１－ＧＳＢ17（９期）、２－Ａ検出面、３－ＬＳＢ156（13期）、４－ＨＳＢ14、５－ＧＳＢ32（10期）、６－ＨＳＢ37（10期）、７－ＫＳＢ55（９期）、８－Ｋ検出面、９－ＬＳＤ37。



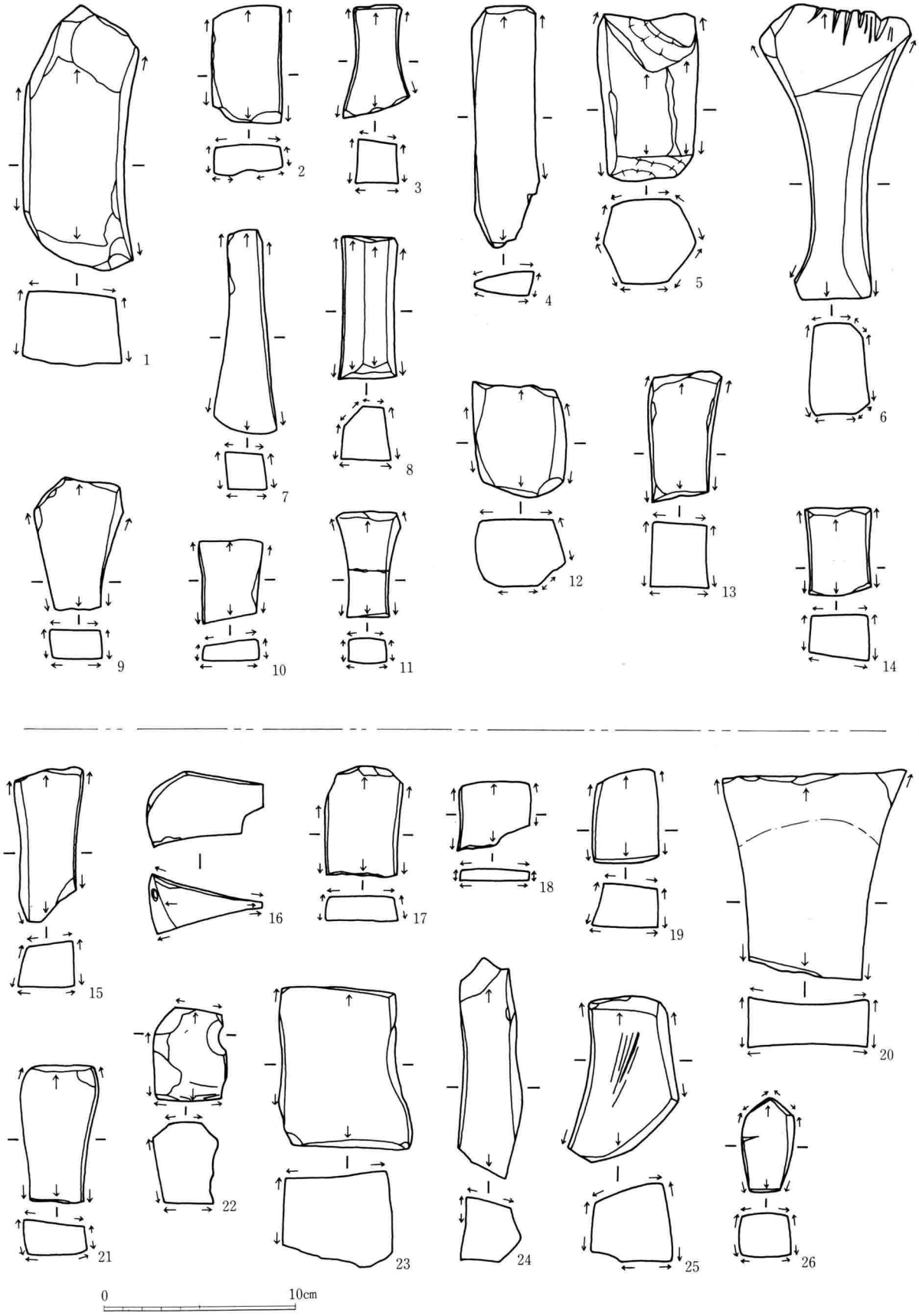
299図　Ⅰ遺構群出土砥石実測図（1：3）



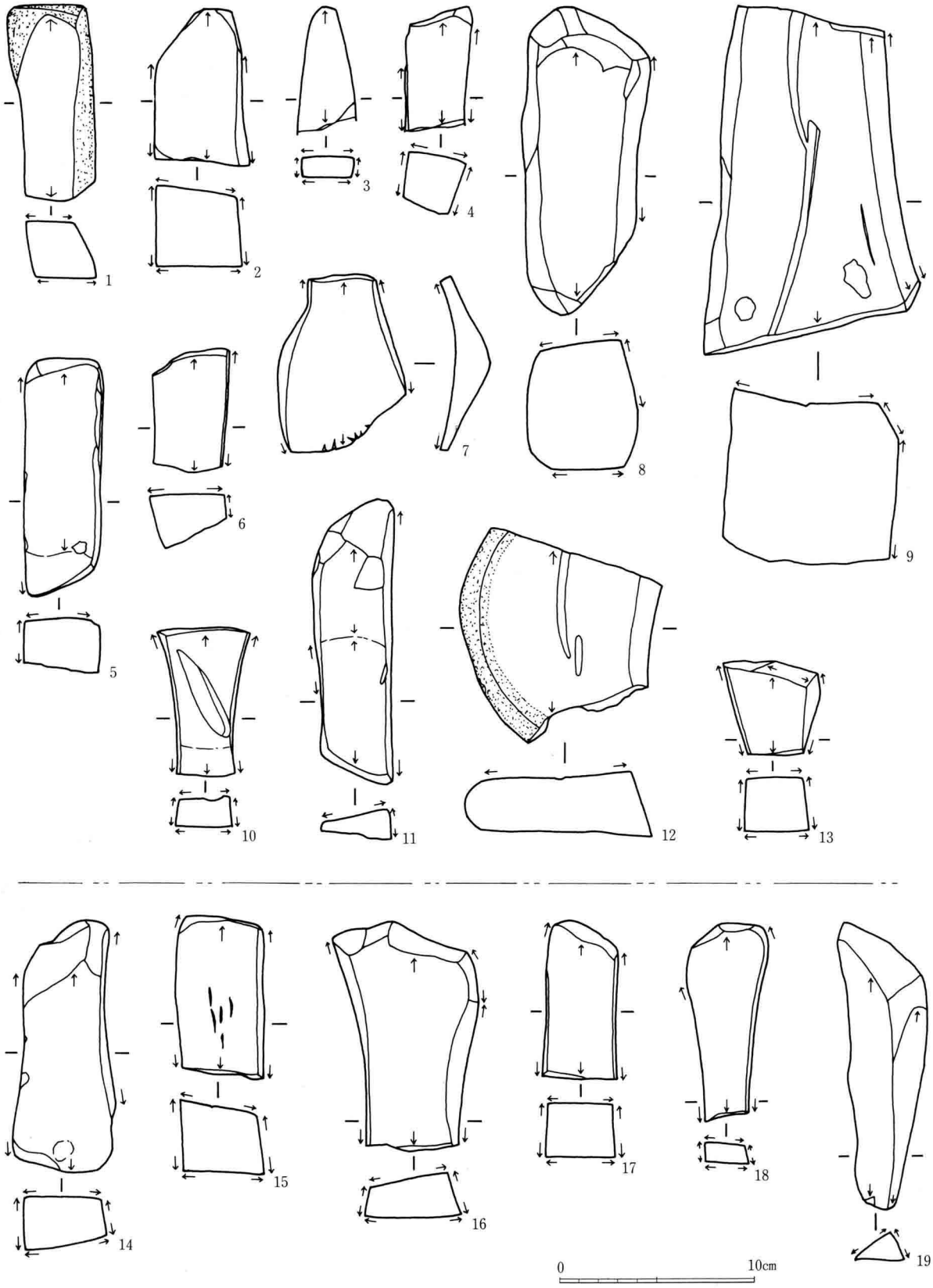
300図　Ⅰ（1～10）・Ⅱ（11～23）遺構群出土砥石実測図（1：3）



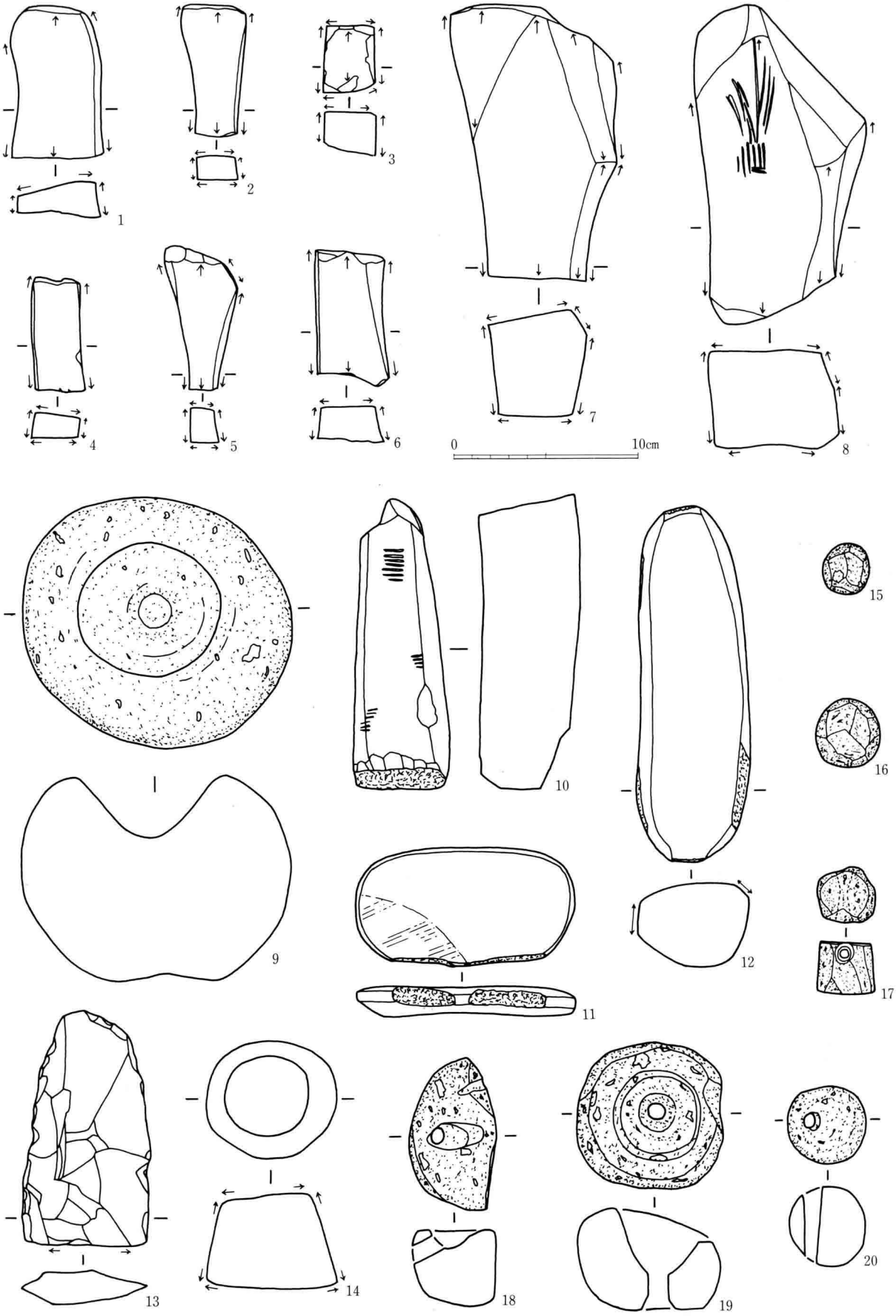
301図　II（1～7）・III（8～22）遺構群出土砥石実測図（1：3）



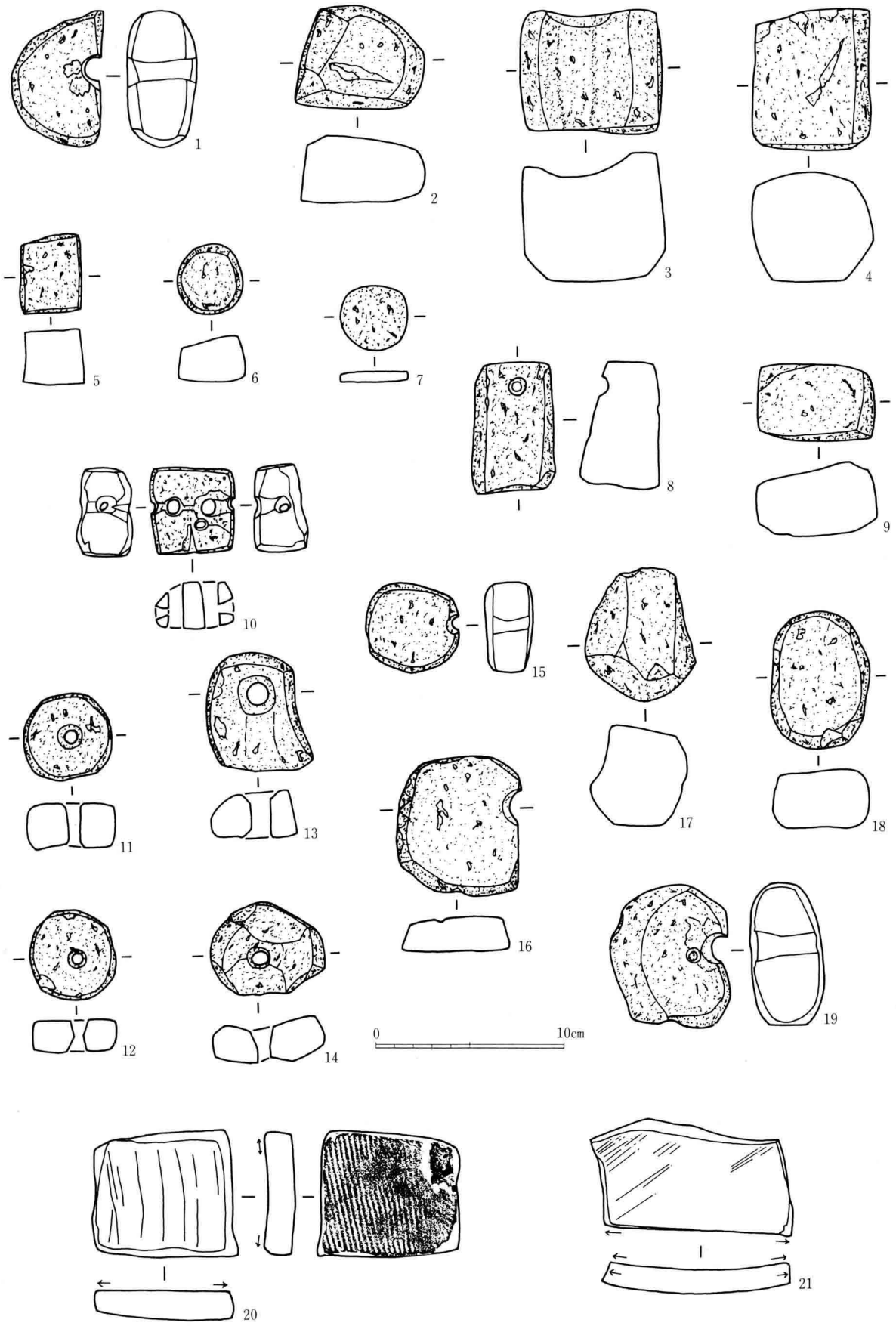
302図　Ⅳ（1～14）・Ⅴ（15～26）遺構群出土砥石実測図（1：3）



303図　Ⅵ（1～13）・Ⅶ（14～19）遺構群出土砥石実測図（1：3）



304図　Ⅶ遺構出土砥石・石製品実測図（1：3）



305図　石製品（1～19）・土製品（20・21）実測図（1：3）

9　石製品（299図～305図）

(1)　砥石（299図～304図１～８）

鉄製品に対応する砥石の出土点数も多い。しかし、中・小形の持ち砥石において初期形態が長方形的なものであったとすれば、出土品の中からその形態を見いだすものは少ない。基部から中央にかけて研ぎ減らされて半凹面形を呈し、最も薄い部分で折れた状態での出土が多い。廃棄物とも考えられるが、接合できるものはない。124軒の住居址、５基の土坑、５条の溝址から出土している。出土住居址分布では各遺構群全体に認められるが、Ⅰ・Ⅱ遺構群から離れるにつれ減少傾向にある。石材から流紋岩・頁岩・粘板岩・チャート等の製品は仕上げ砥石、砂岩等の粒子の荒いものは荒砥石、細かい粒子のもは中砥石である。形態的に現在に通じるところがあり、時期の記載は省略する。この他に須恵器甕の体部片を利用した砥石と推定されるものが２点出土している。

図番号	石材	用途	遺　構	図番号	石材	用途	遺　構	図番号	石材	用途	遺　構
299－１	流紋岩	仕上砥	ＡＳＢ３	－８	砂　岩	荒　砥	ＤＳＢ33	－21	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ198
－２	流紋岩	〃	ＡＳＢ９	－９	流紋岩	仕上砥	ＤＳＤ	－22	砂　岩	中　砥	ＩＳＢ209
－３	流紋岩	〃	ＡＳＢ16	－10	流紋岩	〃	ＬＳＢ７	302－１	流紋岩	仕上砥	ＨＳＢ29
－４	流紋岩	〃	ＡＳＢ19	－11	砂　岩	荒　砥	ＥＳＢ17	－２	流紋岩	〃	ＩＳＢ60
－５	流紋岩	〃	ＡＳＢ17	－12	砂　岩	〃	ＥＳＢ22	－３	流紋岩	〃	ＩＳＢ６
－６	流紋岩	〃	ＡＳＢ９	－13	流紋岩	仕上砥	ＥＳＢ40	－４	流紋岩	〃	ＩＳＢ74
－７	流紋岩	〃	ＡＳＢ27	－14	砂　岩	中　砥	ＦＳＢ52	－５	砂　岩	荒　砥	ＩＳＢ124
－８	砂　岩	荒　砥	ＡＳＢ53	－15	砂　岩	荒　砥	ＧＳＢ５	－６	砂　岩	〃	ＩＳＢ230
－９	流紋岩	仕上砥	ＢＳＢ１	－16	流紋岩	仕上砥	ＥＳＢ28	－７	流紋岩	仕上砥	ＩＳＤ66
－10	流紋岩	〃	ＡＳＢ25	－17	流紋岩	〃	ＦＳＢ４	－８	砂　岩	荒　砥	ＩＳＢ74
－11	チャート	〃	ＡＳＢ31	－18	流紋岩	〃	ＦＳＢ33	－９	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ231
－12	砂　岩	中　砥	ＡＳＢ52	－19	流紋岩	〃	ＦＳＢ１	－10	流紋岩	〃	ＩＳＢ258
－13	流紋岩	仕上砥	Ａ検出面	－20	流紋岩	〃	ＦＳＢ52	－11	砂　岩	中　砥	ＩＳＢ261
－14	流紋岩	〃	ＣＳＢ18	－21	砂　岩	中　砥	ＦＳＢ64	－12	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ240
－15	頁　岩	〃	ＣＳＢ26	－22	砂　岩	〃	ＦＳＢ39	－13	砂　岩	荒　砥	ＩＳＢ232
－16	流紋岩	〃	ＢＳＢ５	－23	砂　岩	荒　砥	ＧＳＢ27	－14	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ229
－17	流紋岩	〃	ＡＳＢ17	301－１	流紋岩	仕上砥	ＧＳＢ28	－15	砂　岩	中　砥	ＩＳＢ４
－18	砂　岩	荒　砥	ＡＳＢ36	－２	流紋岩	中　砥	ＧＳＢ５	－16	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ136
－19	砂　岩	中　砥	ＣＳＢ11	－３	砂　岩	荒　砥	ＨＳＤ18	－17	砂　岩	中　砥	ＩＳＢ183
－20	流紋岩	仕上砥	ＣＳＢ６	－４	流紋岩	仕上砥	ＨＳＢ47	－18	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ141
－21	流紋岩	〃	ＣＳＢ17	－５	砂　岩	荒　砥	ＨＳＢ53	－19	流紋岩	〃	ＩＳＢ141
－22	流紋岩	〃	ＣＳＢ32	－６	流紋岩	仕上砥	ＨＳＢ41	－20	砂　岩	荒　砥	ＩＳＢ213
－23	砂　岩	荒　砥	ＤＳＢ１	－７	流紋岩	〃	ＨＳＢ30	－21	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ151
－24	砂　岩	〃	ＤＳＤ14	－８	流紋岩	〃	ＩＳＢ27	－22	流紋岩	〃	ＩＳＢ172
－25	流紋岩	仕上砥	ＤＳＢ20	－９	流紋岩	〃	ＩＳＢ102	－23	砂　岩	荒　砥	ＪＳＢ３
－26	流紋岩	〃	ＤＳＢ23	－10	流紋岩	〃	ＩＳＢ109	－24	流紋岩	仕上砥	ＪＳＢ32
－27	流紋岩	〃	ＤＳＢ108	－11	砂　岩	荒　砥	ＩＳＢ95	－25	砂　岩	中　砥	ＪＳＢ23
－28	流紋岩	〃	ＤＳＢ124	－12	砂　岩	中　砥	ＩＳＢ176	－26	砂　岩	〃	ＪＳＢ17
－29	砂　岩	荒　砥	ＤＳＢ32	－13	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ103	303－１	流紋岩	仕上砥	ＫＳＢ５
300－１	流紋岩	仕上砥	ＤＳＢ33	－14	流紋岩	〃	ＩＳＢ180	－２	流紋岩	〃	ＫＳＢ８
－２	砂　岩	荒　砥	ＤＳＢ84	－15	砂　岩	中　砥	ＩＳＢ190	－３	流紋岩	〃	ＫＳＢ12
－３	流紋岩	仕上砥	ＤＳＺ２	－16	砂　岩	〃	ＩＳＢ191	－４	流紋岩	〃	ＫＳＢ21
－４	流紋岩	〃	ＤＳＤ２	－17	砂　岩	荒　砥	ＩＳＢ193	－５	流紋岩	〃	ＫＳＢ30
－５	砂　岩	中　砥	ＬＳＢ２	－18	流紋岩	仕上砥	ＩＳＢ196	－６	流紋岩	〃	ＫＳＢ34
－６	流紋岩	仕上砥	ＬＳＢ221	－19	流紋岩	〃	ＩＳＢ111	－７	砂　岩	中　砥	ＫＳＢ37
－７	砂　岩	中　砥	ＬＳＢ72	－20	流紋岩	〃	ＩＳＢ239	－８	流紋岩	仕上砥	ＫＳＢ82

図番号	石材	用途	遺　構	図番号	石材	用途	遺　構	図番号	石材	用途	遺　構
－9	砂　岩	荒　砥	ＫＳＢ90	－16	流紋岩	仕上砥	ＬＳＢ98	－4	流紋岩	仕上砥	ＬＳＢ128
－10	流紋岩	中　砥	ＫＳＢ61	－17	流紋岩	〃	ＬＳＫ83	－5	流紋岩	〃	ＬＳＢ127
－11	砂　岩	〃	ＫＳＢ66	－18	流紋岩	〃	ＬＳＢ168	－6	流紋岩	〃	ＬＳＥ1
－12	砂　岩	〃	ＫＳＫ9	－19	流紋岩	〃	ＬＳＢ153	－7	砂　岩	荒　砥	ＬＳＢ119
－13	砂　岩	〃	ＫＳＢ46	304－1	砂　岩	中　砥	ＬＳＢ153	－8	砂　岩	中　砥	ＬＳＫ123
－14	砂　岩	荒　砥	ＬＳＢ2	－2	流紋岩	仕上砥	ＬＳＢ26	－20	須恵器		ＤＳＫ14
－15	流紋岩	仕上砥	ＬＳＢ39	－3	砂　岩	中　砥	ＡＳＢ3	－21	須恵器		Ｅ検出面

(2)　凹石（304図９）

ＤＳＢ103（８～９期）から１個出土している。安山岩製で上面が叩き込まれてＵ字形にくぼむ。長円形を呈し、最大幅10.0cm・高さ11.0cm・凹部径7.7cm・深さ3.4cmを測る。

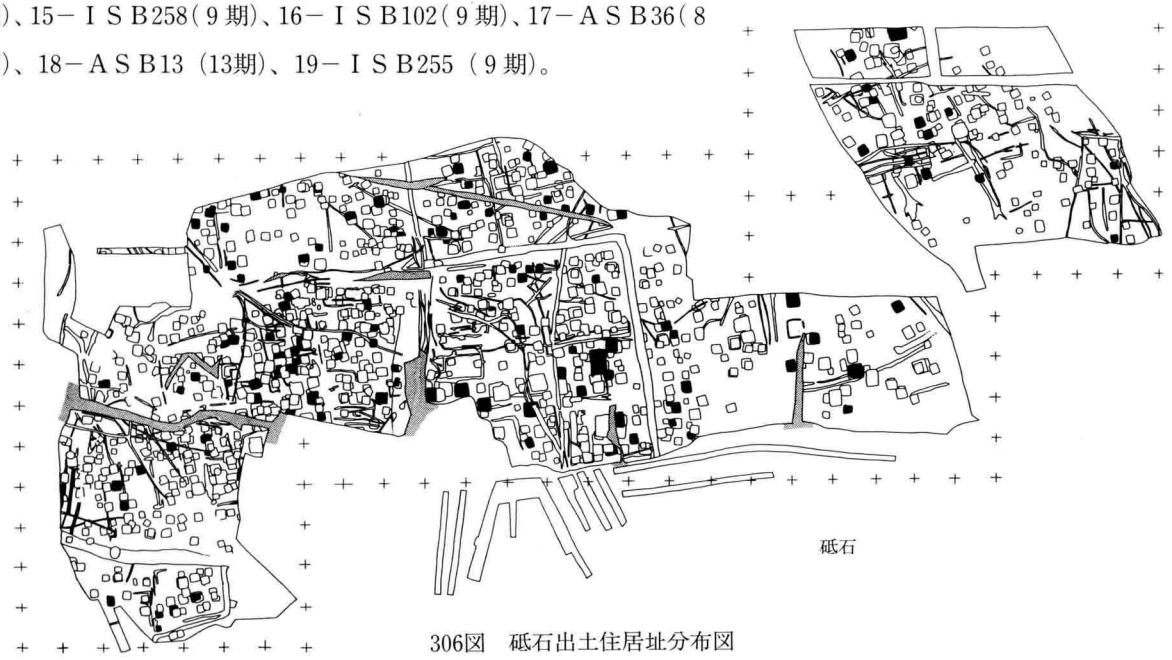
(3)　敲打器（304図10～13）

いわゆる叩き石で、河原石の一端に打痕が認められるものをいう。ただし、５は弥生時代の打製石斧の再利用品とみられる。出土個数は多くなく12軒の住居址に認められるにすぎない。

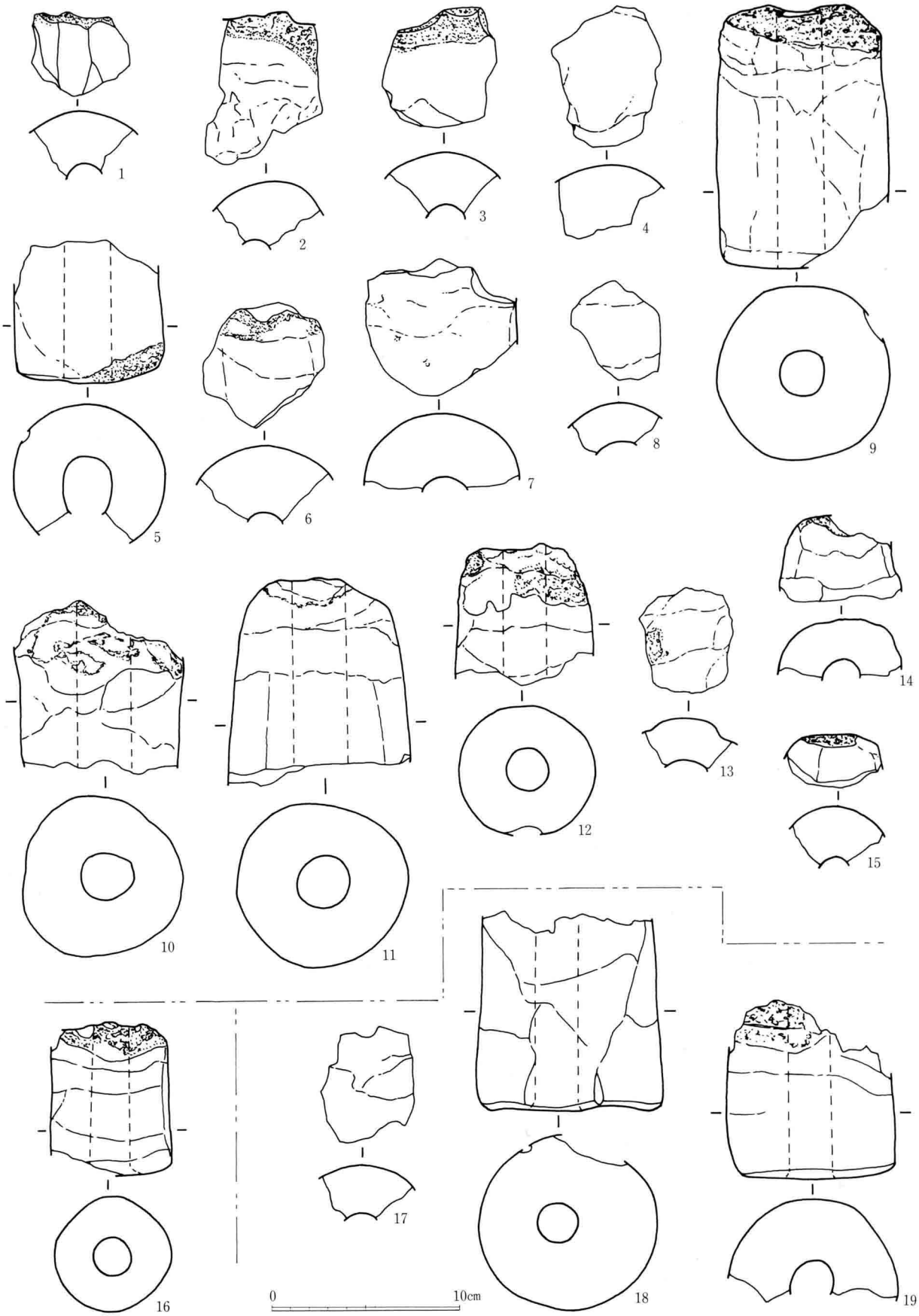
番号	石材	形態	打　痕	遺　構	時　期	番号	石材	形態	打　痕	遺　構	時　期
10	硬砂岩	角柱状	先端	ＩＳＢ75	８～９期	12	硬砂岩	柱　状	先端・側面	ＩＳＢ181	９～10期
11	硬砂岩	小判状	側面	ＩＳＢ190	11期	13	硬砂岩	打　斧	先端	ＧＳＢ32	10期

(4)　軽石製品（304図７～19、305図１～21）

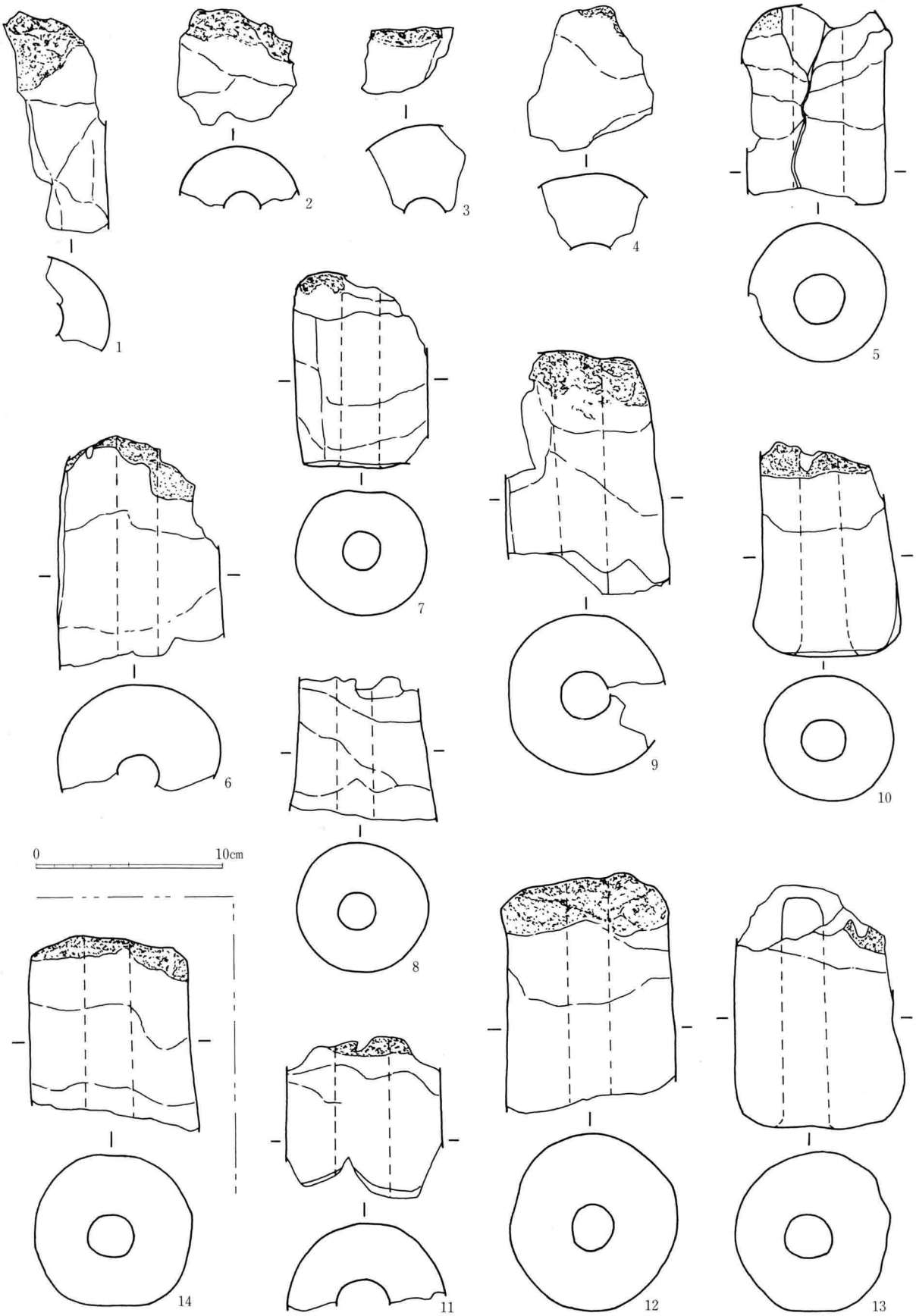
出土した軽石のうち研磨・穿孔等人為の加工痕のあるものを提示する。用途不明な球形なもの（304図15・16）、浮子と推定される円孔が穿たれるもの（17～20、305図11～14）・側面の片方に半円形の抉を有するもの（305図1・15・16・19）、研磨され砥石を思わせるもの（305図２～９・17・18）がある。304図15－ＩＳＢ255（９期）、16－ＩＳＢ265(10期)、17－ＤＳＢ10(９～10期)、18－ＩＳＢ65(９期)、19－ＤＳＢ18(８～９期)、20－ＬＳＢ90(10期)、300図１－ＩＳＢ216（10期）、２－ＤＳＢ18（８～９期）、３－ＫＳＢ44、４－ＩＳＢ268（７期前半）、５－ＥＳＢ14（９期）、６－ＥＳＢ39（９期）、７－ＬＳＢ151（９期）、８－ＣＳＢ15（８期）、９－Ｃ検出面、10－ＨＳＢ８（９～10期）、11－ＧＳＢ10（14期）、12－ＩＳＢ59（10期）、13－ＧＳＢ12（10期）、14－ＩＳＢ１（11～13期）、15－ＩＳＢ258(９期)、16－ＩＳＢ102(９期)、17－ＡＳＢ36(８期)、18－ＡＳＢ13（13期）、19－ＩＳＢ255（９期）。



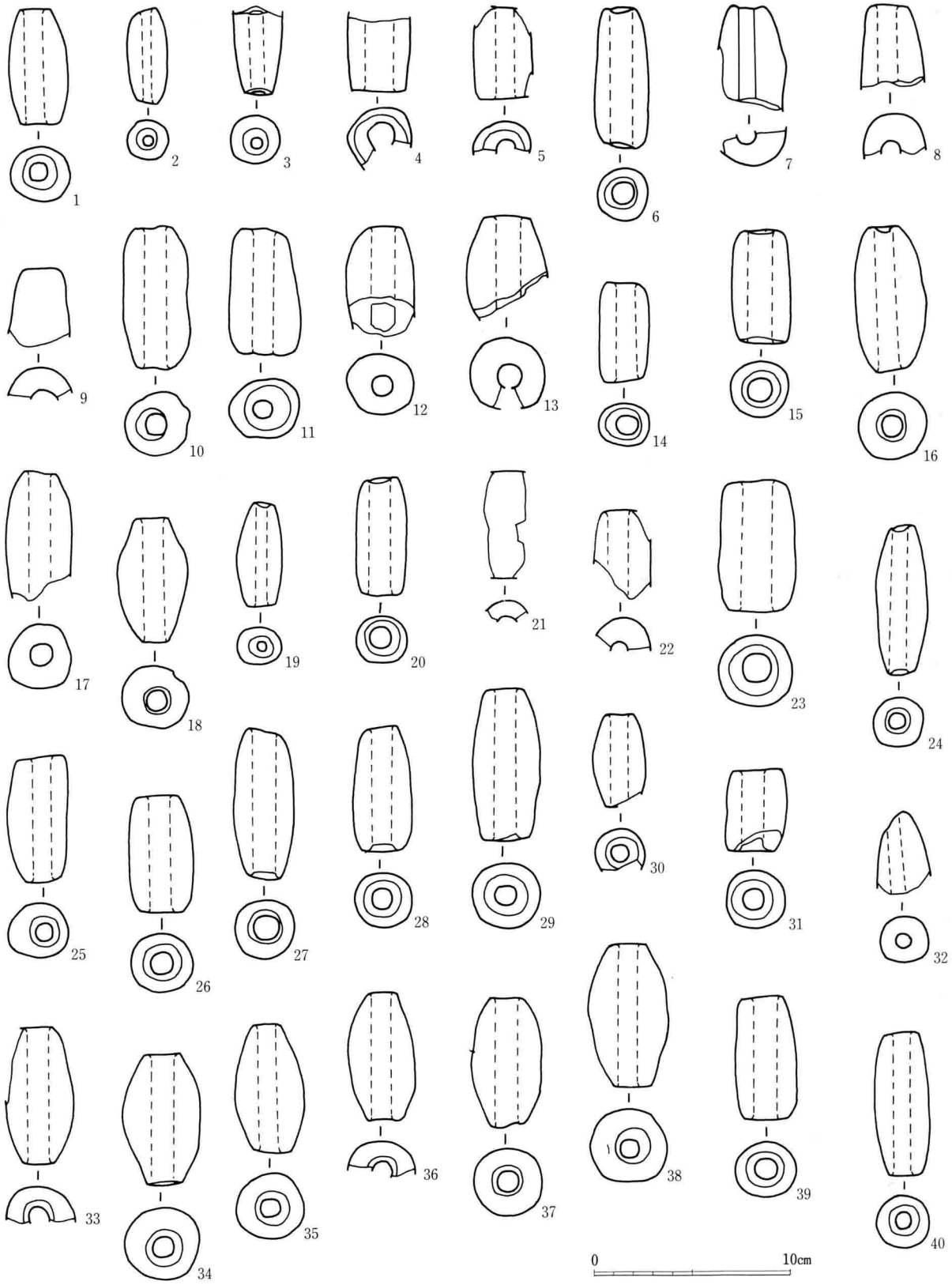
306図　砥石出土住居址分布図



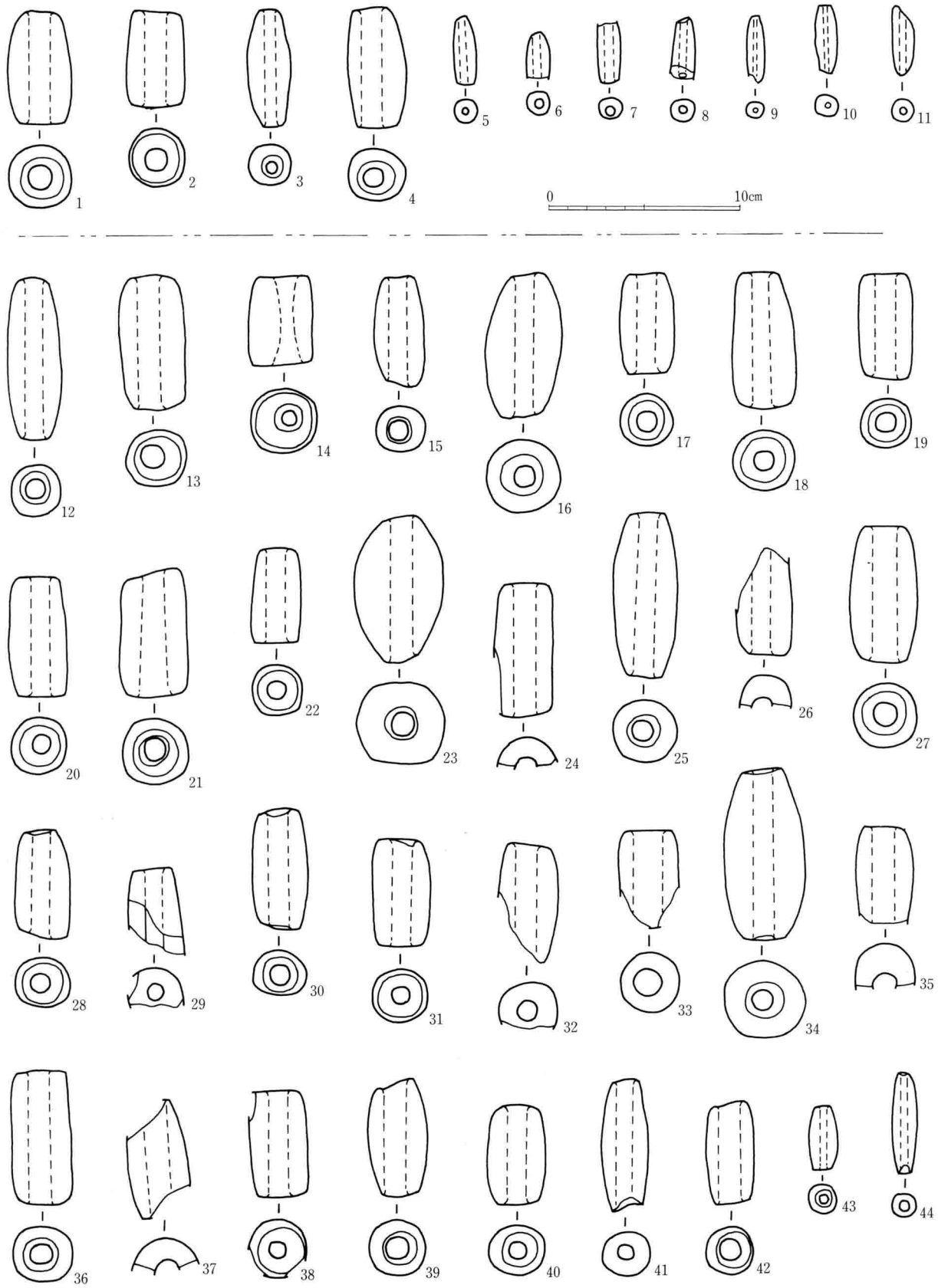
307図　Ⅰ（1～15）・Ⅵ（16）・Ⅶ（17～19）遺構群出土羽口実測図（1：3）



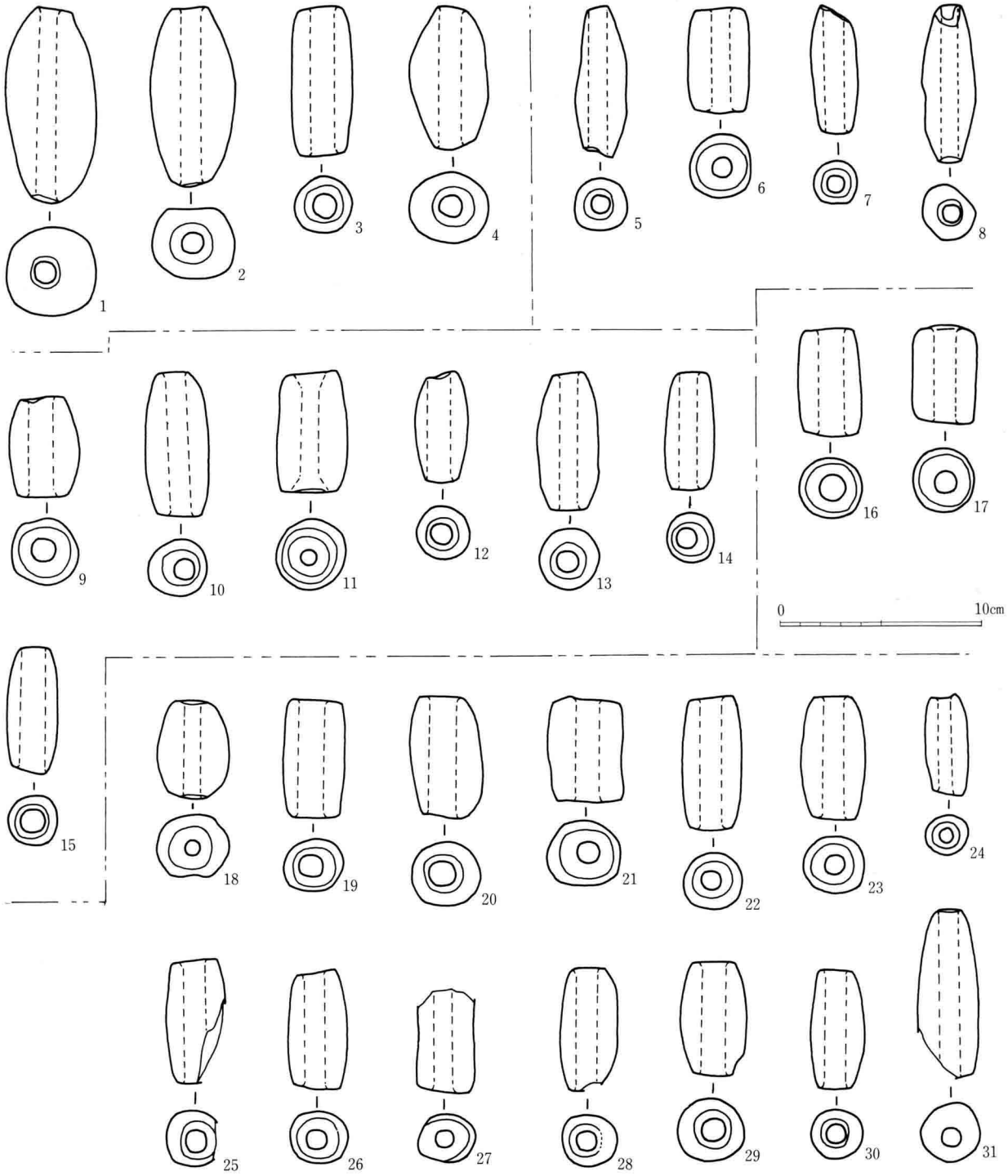
308図　II（1～13）・III（14）遺構群出土羽口実測図（1：3）



309図　Ⅰ遺構群出土土錘実測図（1：3）



310図　Ⅰ（1～11）・Ⅱ（12～44）遺構群出土土錘実測図（1：3）



311図　Ⅲ（1～4）・Ⅳ（5～8）・Ⅴ（9～15）・Ⅵ（16・17）・Ⅶ（18～31）遺構群出土土錘実測図（1：3）

土製品

(1)　羽口（307・308図）

小鍛冶炉とみられる遺構は住居址外から単独で検出したものは7基、住居址内では12軒から確認されている。住居址からのものはほとんどが羽口と鉄滓が共伴して出土している。また、Ⅰ遺構群の住居址279軒のうち羽口と

鉄滓が共伴するもの37軒、羽口のみの住居址16軒、鉄滓のみの住居址73軒あり、小鍛冶関係遺物を出土する住居址は126軒になり、全体の45％を占める。II遺構群では176軒に対し、羽口と鉄滓が共伴63軒、羽口のみ6軒、鉄滓のみ58軒あり、計126軒になり、全体の72％を占める。III遺構群では108軒に対し、羽口と鉄滓が共伴8軒、羽口のみ１軒、鉄滓のみ41軒あり、計50軒になり、全体の40％を占める。IV遺構群では81軒に対し、羽口と鉄滓が共伴８軒、羽口のみ１軒、鉄滓のみ40軒あり、計50軒になり、全体の60％を占める。Ｖ遺構群では92軒に対し、羽口と鉄滓が共伴18軒、羽口のみ１軒、鉄滓のみ47軒あり、計66軒になり、全体の71％を占める。VI構群では107軒に対し、羽口と鉄滓が共伴13軒、羽口のみ０軒、鉄滓のみ36軒あり、計49軒になり、全体の46％を占める。VII構群では171軒に対し、羽口と鉄滓が共伴27軒、羽口のみ３軒、鉄滓のみ55軒あり、計85軒になり、全体の50％を占める。鉄製品の製作・修繕等に活発な作業をよみとることができ、特に羽口と鉄滓共伴する遺構はＩ群が13％、II群が36％、III群が７％、IV群が10％、Ｖ群が20％、VIが12％、VIIが16％の数値を求めることができ、II遺構群の数値が突出する。出土品は小破片が多く、ほぼ完形に近いと思われるものは３点にすぎず、それも全長が14cmのものを最大であることを考慮すれば全て廃棄されたものと思われる。

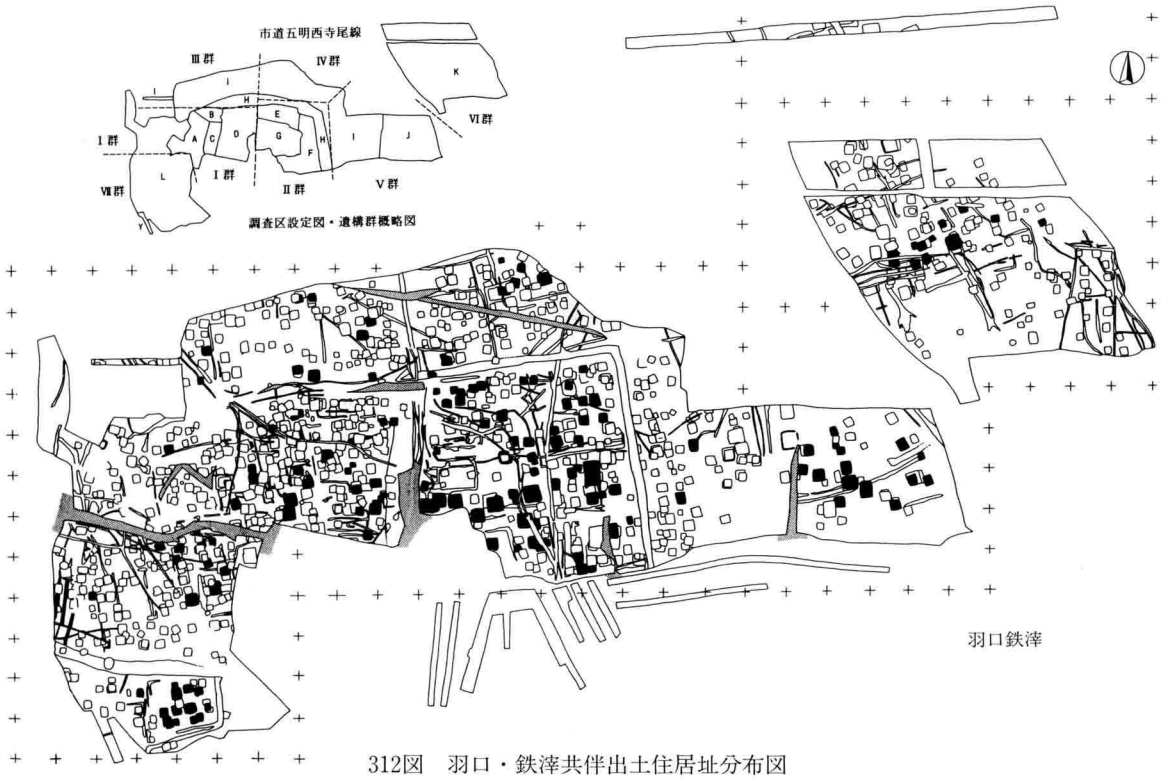
図番号	部位	法量（cm）			遺構	時期	図番号	部位	法量（cm）			遺構	時期
		全長	外径	孔径					全長	外径	孔径		
307－１	先端		(7.5)	(1.9)	ＡＳＢ３	11期	－18	基部		9.4～9.9	2.2	ＬＳＤ40	８～９期
－２	先端		(6.6)	(1.5)	ＣＳＢ６	10期	－19	先端		(9.1)	(2.2)	ＬＳＤ21	
－３	先端		(8.0)	(2.2)	ＡＳＢ７	９～10期	308－１	先端		(6.8)	(2.0)	ＥＳＢ21	８～９期
－４	体部		(8.4)		ＡＳＢ21	９期前	－２	先端		(6.4)	(1.9)	ＥＳＢ19	８期
－５	基部		8.0	2.6	ＡＳＢ25	12期	－３	先端		(9.4)	(1.9)	ＦＳＢ５	10期
－６	先端		(8.5)	(1.7)	ＣＳＢ24	８期	－４	先端		(9.0)	(1.5)	ＦＳＢ45	10期
－７	先端		(8.5)	(2.7)	ＤＳＢ７	12期	－５	完形	10.6	7.2～7.4	2.6	ＧＳＢ９	８期
－８	体部		(7.2)	(3.2)	ＤＳＢ５	12期	－６	先端		(8.7)	(2.2)	ＦＳＢ47	10期
－９	完形	14.0	9.2	2.3	ＢＳＫ４	８期	－７	先端		6.6～6.9	2.0	ＦＳＤ18	10期
－10	先端		8.6	2.5	ＤＳＢ23	11期	－８	体部		7.0～7.7	2.0	ＧＳＢ６	11期
－11	先端		8.7～9.1	2.8	ＤＳＢ30	10期	－９	先端		(8.5)	(2.4)	ＦＳＢ47	10期
－12	先端		6.9～7.3	2.3	ＤＳＤ14	10期	－10	完形	11.4	6.3～7.8	2.2	ＦＳＢ47	10期
－13	体部		(7.2)	(3.0)	ＤＳＢ83	10期	－11	先端		(8.4)	(2.8)	ＨＳＢ37	10期
－14	先端		(6.5)	(2.0)	ＤＳＤ14	10期	－12	先端		8.9～9.6	2.2	ＧＳＢ28	12期
－15	先端		(6.0)	(1.5)	ＤＳＤ14	10期	－13	基部		8.4	2.4	ＧＳＢ12	10期
－16	完形	8.2	6.0～6.2	2.1	ＫＳＢ51	９期	－14	先端		8.0～8.5	2.3	ＩＳＫ98	
－17	体部		(7.6)	(2.0)	ＬＳＤ37	９～10期							

(2) 土錘（309～311図）

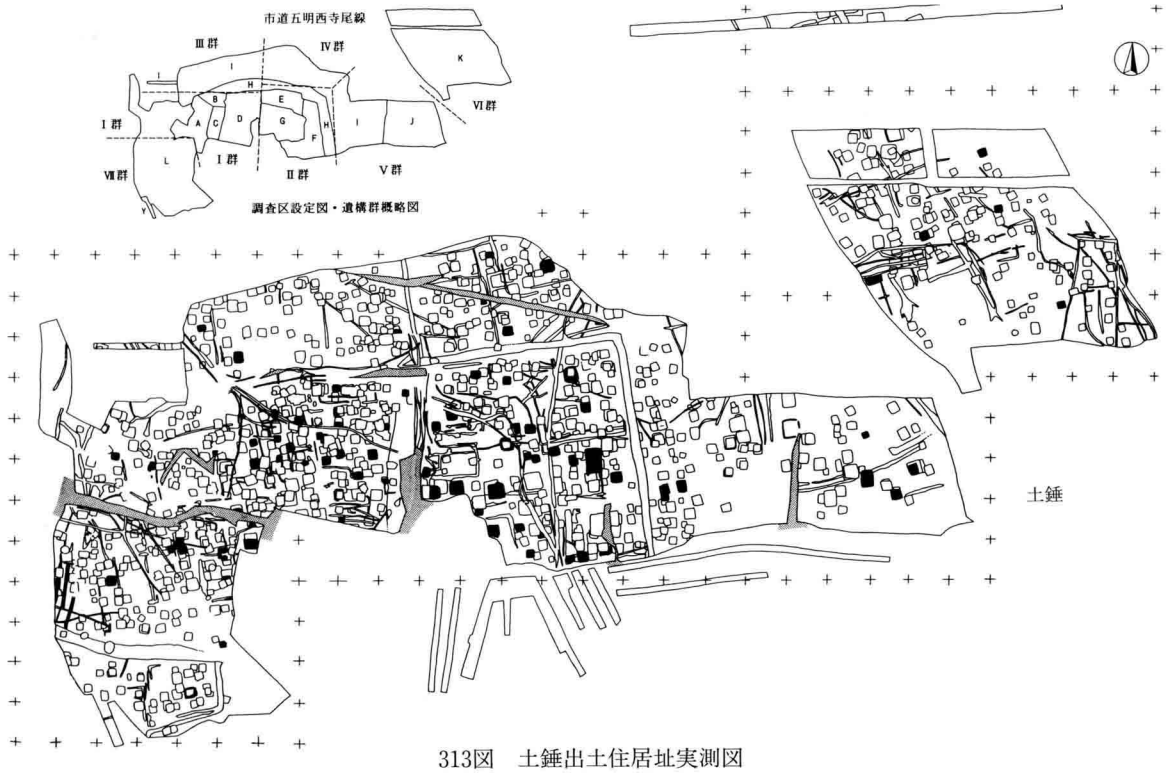
形態は円柱形・紡錘形とこの中間形に分けることができるが、複数個出土している遺構に異形態のものがみられ機能的に分類は困難である。むしろＩ・II遺構群にみられる大型と小型（310図５～11・43・44）に大別し、用途により使い分けられた可能性が高い。前者が川等の動流または沼等の静流用で大型魚を対象にしたもの、後者は静流での小型魚を対象としたものとの考えである。また、今回の調査で最も多く出土した遺構はＤＳＫ36の土坑で10個確認されている。網につけた錘の総体であるのかまたは他の用途に用いられたものであるかどうかを含め検討する必要がある。成形は丸棒に粘土を巻き付け握圧によりなされ、ナデやヘラナデで整形した後、棒を引抜いたものと思われる。

図番号	法量（cm・g）				遺　構	時　期	図番号	法量（cm・g）				遺　構	時　期
	長	幅	孔径	重量				長	幅	孔径	重量		
309－1	5.9	3.1	0.9	48.8	ASB9	15期	－15	5.8	2.7	1.0	33.5	ESB16	10期
－2	5.0	2.2	0.3	24.8	ASB15	9期	－16	7.5	4.0	1.1	114.4	ESB5	
－3		2.5	0.7		ASB11	11期	－17	5.3	2.8	1.1	39.7	FSB17	9期
－4					ASB22		－18	7.2	3.2	1.0	36.4	FSB35	10期
－5	4.8	2.0	1.0		ASB34	9期	－19	5.4	2.5	1.1	42.4	FSB64	8～9期
－6	7.2	2.7	1.2	45.6	ASB45	9期	－20	6.1	3.1	1.0	67.4	FSB63	7期後半
－7		3.6	1.0		ASB68	12期	－21	6.5	3.5	1.3	87.6	F検出面	
－8		3.3	1.0		CSB3	8期	－22	5.0	2.7	1.0	40.0	FSD18	10期
－9					CSB3	8期	－23	7.7	4.7	1.2	147.6	GSB1	10期
－10	7.2	3.3	1.1	72.8	CSB3	8期	－24	7.1	3.2	1.1		GSB5	8期後半～9期
－11	6.4	3.5	1.1	68.5	CSB3	8期	－25	8.7	3.4	1.1	95.3	GSB11	10期
－12		3.4	1.1		CSB3	8期	－26		3.3	1.1		GSB11	10期
－13		3.9	1.2		CSB3	8期	－27	7.2	3.5	1.2	73.1	GSB27	9期
－14	5.0	2.6	1.0	28.2	DSB43	10期	－28	5.7	3.0	1.1	48.5	GSB30	8期
－15	5.7	3.0	1.3	51.7	DSB43	10期	－29		2.8	0.9		GSB30	8期
－16	7.4	3.6	1.1	94.2	DSB43	10期	－30	6.3	2.9	1.1	37.2	GSB30	8期
－17		3.3	1.2		CSB6	10期	－31	5.7	2.9	0.9	55.5	GSB30	8期
－18	6.4	5.5	1.2	54.5	DSB9	8期	－32	6.1	3.2	1.1		GSB32	10期
－19	5.4	2.3	0.5	22.5	DSB15	10期	－33	5.3	3.2	1.4		GSK5	8期
－20	6.0	2.6	1.2	40.5	DSB16	9期	－34	9.0	4.3	1.1	156.9	GSB33	9期
－21	5.8				CSB1	8期	－35		3.1	1.2		GSK18	9期
－22		3.2	0.9		DSB31	10期	－36	7.1	3.2	1.1	76.9	GSK68	
－23	6.7	3.8	1.5	93.2	DSB63	10期	－37	6.2	3.6			GSD15	10期
－24	7.6	2.5	0.9	47.8	DSB74	10期	－38	5.6	3.2	1.0		GSB19	10期
－25	6.5	3.1	0.9	57.7	DSB112	8～9期	－39	6.2	3.1	1.2	38.9	GSD13	
－26	6.0	3.2	1.1	58.7	DSB107	8期	－40	5.3	3.0	0.9	43.6	GSD19	10期
－27	7.3	3.0	1.2	58.9	DSB107	8期	－41	6.9	2.5	0.8	(36.4)	HSB56	12期
－28	6.3	3.0	1.1	55.5	DSB117	8～9期	－42	5.3	2.6	1.2	30.7	GSD34	9期前
－29	7.7	3.5	1.1	97.1	DSB117	8～9期	－43	3.4	1.6	0.4	7.8	FSB5	11期
－30	4.6	2.4	0.9	(23.8)	DSD21	10期	－44	5.4	1.3	0.5	7.9	GSB32	10期
－31	4.2	3.0	1.1	(38.8)	DSK36	7期後半	311－1	9.8	4.5	1.1	164.6	ISB95	11期
－32		2.5	0.8		DSD14	10期	－2	8.9	4.2	1.1	129.3	ISB95	11期
－33	7.0	3.5	1.1		DSK36	7期後半	－3	7.4	2.9	1.2	72.2	ISB197	11期
－34	6.7	4.0	1.1	87.6	DSK36	7期後半	－4	7.1	4.0	1.2	89.6	ISB205	8～9期
－35	6.6	2.5	1.0	68.1	DSK36	7期後半	－5	7.5	2.6	0.9	47.2	ISB53	9期
－36	6.5	3.4	1.1		DSK36	7期後半	－6	5.2	3.1	0.9	53.2	ISB80	8～10期
－37	6.6	3.6	1.1	77.5	DSK36	7期後半	－7	6.4	2.3	0.9	35.0	ISB246	7期後半～10期
－38	7.2	4.0	1.0	101.4	DSK36	7期後半	－8	7.9	2.8	1.0	58.3	ISB258	9期
－39	6.3	3.2	1.2	55.5	DSD11		－9	4.9	3.4	1.1	60.2	ISB7	9期
－40	7.3	2.8	0.9	55.2	DSD17		－10	7.1	3.0	1.1	46.1	ISB14	10期後
310－1	6.0	3.4	1.3	63.6	DSX1		－11	6.0	3.5	0.8	60.7	JSB16	10期
－2	5.1	3.2	1.2	49.0	DSX1		－12	5.5	2.6	1.1	23.4	JSB21	
－3	6.2	2.2	0.5	29.7	LSB210	7期後半	－13	6.8	3.0	0.9	61.4	JSB24	
－4	6.4	3.1	1.0	52.1	LSB216	7期後半	－14	5.8	2.4	1.1	33.3	JSB38	
－5	3.7	1.3	0.4	5.6	CSB28	8期	－15	6.2	2.5	1.2	31.2	J検出面	
－6		1.3	0.3	(3.6)	CSD8		－16	5.2	3.1	1.3	55.8	KSB4	14期
－7		1.3	0.4	(4.0)	DSB94	10期	－17	4.9	3.2	1.1	53.6	KSB51	9期
－8		1.2	0.4	(4.0)	DSD14	10期	－18	4.8	3.6	0.7	57.8	LSB26	12期
－9	3.6	1.0	0.2	(3.2)	LSB18	8期	－19	5.8	3.0	1.2	57.7	LSB113	10期
－10	3.6	1.2	0.2	5.4	LSB18	8期	－20	6.0	3.5	1.3	58.9	LSB62	10期
－11	3.7	1.2	0.3	4.8	LSB180	10期	－21	5.1	3.6	1.0	73.8	LSB154	10期
－12	8.6	2.8	1.0	66.9	ESB3	9期	－22	6.6	2.9	1.1	55.3	LSB174	7期後半
－13	7.0	3.3	1.2	69.2	ESB7	8～9期	－23	6.0	3.1	1.1	56.0	LSB184	13期
－14	4.9	3.3	0.7	58.6	ESD1	10期	－24	5.0	2.1	0.8	20.5	LSB186	6期

図番号	法量（cm・g）				遺　構	時　期	図番号	法量（cm・g）				遺　構	時　期
	長	幅	孔径	重量				長	幅	孔径	重量		
−25	6.0	3.0	1.1		ＬＳＢ84	８期前	−29	5.9	3.3	1.2	51.4	ＬＳＤ21	
−26	5.9	2.9	1.0	46.0	ＬＳＢ188	13期	−30	5.9	2.6	1.0	42.3	ＬＳＤ58	
−27	5.2	2.7	0.8		ＬＳＢ188	13期	−31	8.4	3.1	1.0	(68.7)	ＬＳＤ21	
−28	6.0	2.8	1.0	(38.5)	ＬＳＢ226								



312図　羽口・鉄滓共伴出土住居址分布図



313図　土錘出土住居址実測図

Ⅵ 結 語

［南宮遺跡の変遷］

今回の調査で、遺構から出土する等の理由で時期判断の対象となった遺構は1351遺構にのぼった。住居址だけでも1008軒に及んだ。出土遺物が少なく時期が限定できなかったり、不明とせざるをえない遺構も多かったが、ここでは時期が限定できた遺構を対象として南宮遺跡の変遷過程をおってみたい。時期が限定できた遺構は時期別遺構数表のとおりである。３時期以上にわたる時期幅をもつものや、～期前後と認識したものについては除外してある。１時期に限定できるもののみを抽出して時期別に遺構数の変化をまとめると時期別遺構数の変化グラフのとおり表せる。グラフによると南宮遺跡において住居址が出現するのは古代５期の８世紀末～９世紀初頭であり、古代10期（10世紀中頃）にピークをむかえ、古代15期（11世紀後半）を最後に終焉をむかえる。以下、南宮遺跡時期別遺構変遷図（269～280図）を参考にしながら考察をおこなう。なお、遺跡内に多数存在する溝址については、集落域を囲む区画溝も多くあると思われるが、遺物量が少なく時期の限定が難しいものが多かったため、今回の考察でとりあつかっている例はわずかである。また、集落内部の性格を考えるために重要であると思われる祭祀遺物や緑釉陶器・墨書土器・鉄製品等といった特別な遺物、小鍛冶・墓のような特殊遺構については考察の中に加えることができなかった。

時期別遺構数（判別可能数）

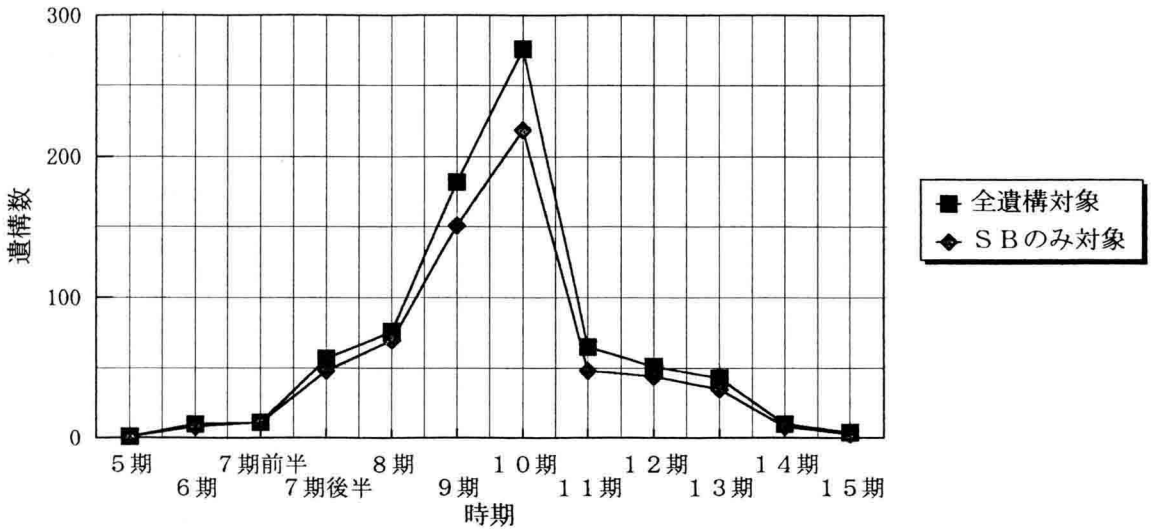
時　期　（世紀）	全遺構	住居址
５期（８Ｃ末～９Ｃ初頭）	1	1
６期（９Ｃ前半）	10	8
６～７期	6	3
７期	6	2
７期前半（９Ｃ第２四半期）	11	11
７期後半（９Ｃ第３四半期）	57	48
７期後半～８期	15	14
８期（９Ｃ第４四半期）	76	70
８～９期	54	44
９期（10Ｃ前半）	182	151
９～10期	35	26
10期（10Ｃ中頃）	276	219
10～11期	2	2
11期（10Ｃ後半）	65	48
11～12期	3	1
12期（10Ｃ後半・末）	51	44
12～13期	7	4
13期（10Ｃ末～11Ｃ初頭）	43	35
13～14期	2	2
14期（11Ｃ前半）	10	8
14～15期	1	1
15期（11Ｃ後半）	4	3
合　　計	917	745

南宮遺跡で発見された最古の遺物はＬ区66号溝址から出土した須恵器（264図24）である。単独の出土であり、口縁部と底部を欠損する。底部に高台がつく器形が想定され、どう新しくみても古代２期（８世紀前半）よりは新しくならないと考えられる。まだこの時期には南宮遺跡は居住域としては利用されておらず、こういった遺物は周辺遺跡からの人の動きに伴う流れ込み的性格をもつものであろう。周辺遺跡としては田中沖遺跡に同様の時期の集落跡が存在している。

南宮遺跡が居住域として利用され始めるのは古代５期からである。調査地の東端に位置する第Ⅵ遺構群のＫ区に１軒のみ住居址が確認できる（269図）。古代５期は８世紀末～９世紀初頭に位置づくが、遺構の少なさと次の時期への連続性から南宮遺跡の展開は９世紀初頭と考えられる。

古代６期（９世紀前半、270図）　住居址がやや増加し８軒の住居址が確認できる。居住する範囲も調査区東端のＫ区のみでなく、調査区西端の第Ⅶ遺構群Ｌ区にも拡大する。調査区中央部の広大な無住居地区を挟んで東西両端にいずれも複数の住居址が集まるような形態をとって集落が細々と展開する。

古代７期前半（９世紀第２四半期、271図）　前時期に居住域として利用されたＫ区では住居址がなくなり、もう一方のＬ区では住居址数の増



南宮遺跡時期別遺構数の変化

大がみられる。同時期での重複がみられるため何時期かに分かれるであろうが、数軒の単位で集まるように集落が展開する。また、住居址の総数は前時期とほとんど変わらないが、調査区中央部にも住居址が確認でき徐々に変化していく姿が確認できる。

古代７期後半（９世紀第３四半期、272図）　住居址総数は48軒となり、前時期の４倍に増加する。住居址は調査区東側のＪ区やＫ区ではみられないものの、北端の調査地市道篠ノ井中586号線地点や市道五明西寺尾線地点にみられるようになる。また、住居址がみられないＫ区には古代７期後半～８期という時期幅をもった住居址が９軒存在し、この中のいくつかはこの時期に属するものと考えると、居住範囲は南宮遺跡のほぼ全域に拡大するとみてよいだろう。集落の在り方は、住居群としてまとまりをもった地域が遺跡全体に分散して存在する様相を呈している。その中でも特にＬ区を中心とした一帯は住居址密集度が高く、居住域を区画する溝も伴っている。集落のまとまりの中における大きい家と小さい家の関係は、部分的にはみられてはいるものの古代８期（９世紀第４四半期)以降にみられるほど顕著な在り方を示していない。前時期に居住の中心だったＬ区での集落が大きく発展し、無居住地域だった南宮遺跡のその他の地域にも居住域がいくつかまとまりをもちながら拡大していく時期といえよう。

古代８期（９世紀第４四半期、273図）　集落変遷の上での大きな画期となる時期である。前時期の集落の様相は該期において長野県内で一般にみられるものであるが、この時期の南宮遺跡では、住居址が第Ｉ遺構群の調査区中央部西側とＬ区に集中する。前時期と比べて立地面で大きな変化を示す。また、集落景観をみても重複関係が存在するのでいくつかの時期に分けられようが、住居址の集中の仕方が方形を意識しているように見受けられる。前時期までの集落の拡大の背景は、他地域からの人々の流入もあろうが、それまで南宮遺跡の居住の中心地区だったＬ区の人々が徐々に力をつけて居住域が拡大していった姿も考えれる。しかし、この時期の集落の在り方は南宮遺跡の人々の内部の発展によるものではなく、明らかに外からの大きな力によって集落が一定の場所に集められたかの様相を呈しているといえよう。また、集落のまとまりの内部において大きな家と小さな家の存在が顕著になってくるのもこの時期からである。

古代９期（10世紀前半、274図）　住居址数は著しく増加する。前時期の76軒と比べこの時期は151軒にも達する。住居数はなんと２倍強にもなり巨大な集落に発展する。居住域は前時期の中心地域が更に発展する。前時期の中心だった調査区中央西側地域は更に大きく発展し、調査区の中央部全域を占めるようになる。そして、この集落の大きなまとまりの中を区画する大溝（ＨＳＤ６・ＩＳＤ１）が掘削される。この溝は調査地中央部を南北

に流下する自然流路と接続していたものと考えられ、集落の内部に大きく区画された第II遺構群を形成する地域が出現することになる。この方形に区画された内部には、区域外の地域よりより大型の住居址が存在し、大きな家と小さな家の区別が明確である。また、住居のない空間が存在し、その空間をコの字に囲むかのような住居配列をしている。区画外の地域は、いくつかのまとまりをつかめそうである。それぞれに大きな家が存在し、小さな家を伴いながら居住区間を構成している。前時期にもう一つの居住の中心だったＬ区でも確実に居住域の拡大がみられる。集落内を東西に区画する溝（ＬＳＤ20）もみられるが住居址の規模に大きな変化はみられない。また、Ｋ区にも住居が増加しはじめる。このように該期の南宮遺跡は、調査区中央部に巨大な区画溝で区画された部分を中心として、それに付随する複数のまとまりによって構成された巨大集落ということができよう。そして、この集落を平面的にみた場合前時期と同様な方形を基本とした構成が指摘できよう。

古代10期（10世紀中頃、275図）　南宮遺跡が最も繁栄した時期であり、住居址総数は219軒に達する。居住範囲は前時期と同様で遺跡の全域におよび、前時期に稀薄だったＪ区を中心とした地域にも集落が展開する。巨大集落の中心部分は調査区中央部に位置する第Ｉ・II遺構群で、前時期と同様の区画溝をもち、西側の区画部分として新たにＤ区14号溝址が掘削される。区画溝の内部はいくつかの溝により更に４つに分割され、分割された一番大きな地区には住居のない空間が存在する。この空間は溝で囲まれており特別な施設が存在した可能性が高い。区画溝内部の住居址はこの方形の溝に囲まれた特別な場所を取り囲むようにコの字形に配列される。大きな家と小さな家の区別が明瞭であり、よく観察すると４つに分割された居住域のそれぞれに一つづつ巨大な家が存在している。重複関係があるため同時存在ではないにしろ、区画された空間と大小の家の関係はあるように考えられる。調査区中央部の区画溝外の第III・IV遺構群地域の在り方は前時期と共通しているといえる。この時期は調査区中央部の大溝により区画された地区を中心に南宮遺跡が最も大きく発展し、巨大集落としての偉容を見せつける時期であるが、この大溝もこの時期の終りには埋没することが同時期の住居址と重複関係をもつことから知られる。

古代11期（10世紀後半、276図）　集落変遷上で第２の画期となる。その内容は巨大集落解体という言葉で表現できるほどの衰退である。調査区中央部に存在した区画大溝はすでに存在しない。住居址数は前時期の219軒から48軒に激減する。次の古代12期（276図）も10世紀後半の範疇でとらえられるが、それまでも含めても住居址総数は92軒で衰退傾向は非常に顕著である。調査区中央部における集落の核は完全に消滅し、居住域は遺跡全体におよぶものの集落全体を代表するような核にあたる部分がみあたらなくなる。集落の景観は、住居群としてまとまりをもった地域が遺跡全体に分散して存在する様相で、古代７期後半にみられた様相と類似する。住居の大小の関係は、それぞれの分散されたまとまり中に存在している。古代12期も同様の状況といえる。

古代13期（10世紀末～11世紀初頭、278図）　基本的には11期や12期にみられた様相と同様である。住居址総数は35軒と減少傾向は続いている。居住域は遺跡全体におよび、Ｌ区とＪ区を中心として集落のまとまりがみられるものの、他の地域では礪波平野の散村をみるかのようにポツンポツンと住居が点在している。同時期の塩尻市吉田川西遺跡では区画溝を伴って豪族の館が検出されているが、南宮遺跡では大きい家と小さい家の区別はあるものの区画溝はみられない。

古代14期（11世紀前半、279図）　集落変遷における第３の画期といえる時期である。住居址数は極端なまでに激減し、わずか８軒しか確認されない。居住域は遺跡全域に広まっているものの同時期の重複関係にあるものがあることから考えると住居群としてのまとまりは確認できず、１軒１軒がポツンポツンと距離をおいて点在するまさに散村形態の集落景観になってしまう。ここでの画期のポイントは古代11期～13期にみられた大きな家を中心とするいくつかのまとまりのある集落景観から、見事なまでの散村形態への変化といえよう。

古代15期（11世紀後半、280図）　住居数は３軒までになってしまう。居住範囲も調査区中央部西側のごく一定の地域のみになり、その衰退傾向は甚だしい。古代10期には住居址が219軒にも達し繁栄を誇った巨大集落もこの15期を最後に消滅する。（鳥羽英継）

［南宮遺跡の性格］

階級的官人の存在が予想される石銙は８期・９期に比定されるものが多く、それもⅠ・Ⅱ遺構群に集中している。この時期は集落の形成期にあたり、政治的目的・意図をもって形成された可能性がある。また、９期に至ると方形の大溝に囲まれた区画域が作られ、中に大型の住居址の存在が目立つようになり、10期に至ると盛期をむかえる。Ⅱ・Ⅴ遺構群の南は無居住遺構地域であるなど計画性がうかがえる。形成期末にあたる９期10世紀前半は注目すべき事象がある。承平５年（935）頃に古代村落名を記載した『和名類聚抄』が著され、川中島扇状地には斗女・池郷・氷鉋の郷名がみえ、記載順や現存名・遺跡の規模・多量の出土遺物そして特殊遺物の多さから南宮遺跡は斗女郷に比定して間違いなかろう。８期の集落は氷鉋斗女命神社を奉祭する地縁共同体が人口の増加により斗女・氷鉋の２郷に分割された時期とみてよいだろう。

［南宮遺跡の終焉］

10期に隆盛を極めた南宮遺跡は11期に至ると集落形態が激変してしまう。その後細々ながら点在的集落が継続していくのであるが、15期11世紀後半をもって人工的な遺構は消滅してしまう。10期から11期にかけての遺跡の展開の中に消滅の要因があるように思う。10期の有力勢力であったⅠ・Ⅱ遺構群居住者や周辺の有力者が集団で移動した結果と考えるが、政治的背景は今のところ思いつかない。千曲川の氾濫による消滅を考えている人もいるが、発掘調査からその根拠は得られていない。むしろ10期の終り頃には区画大溝が消滅していることが重要な原因ではないかと考えられる。８期頃に自然流路と呼称した溝が開削され、それを大規模に再開削したのが９期であり、流水より田畑の給水・飲料・汚物の処理等の機能を有していたものが、溝の整備よりも犀川による堆積土量の方が勝っていたため水路として機能を失い、大規模集落を支えていた生産基盤の衰退をもたらし、更に多人口の集落民を枯渇に陥れる事態になったのではないかと推測する。

報告書抄録

ふりがな	なんぐういせき
書名	南宮遺跡II
副書名	南長野運動公園建設地
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第96集
編集者	矢口忠良・千野　浩・鳥羽英継
編集機関	長野市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212　長野県長野市小島田町1414　Tel026-284-0004
発行年月日	2001年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南宮遺跡	長野県(ながのけん) 長野市(ながのし) 篠ノ井他	20201	E－032	36度 34分 42秒	138度 10分 08秒	19930714 ～ 19960731	60,600	南長野運動公園建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南宮遺跡	集落跡	平安時代 （古代5期 ～15期）	検出住居址 1,014軒 時期確認遺構 住居址　1,008軒 溝址　156条 土坑　175基 地鎮祭遺構	土器・陶器類多量 鼎形土器 異形緑釉陶器 宗清銘土製印鑑 八稜鏡・和鏡 火熨・銅椀・銙帯 鉄製品多数	和名抄記載の斗女郷の中心集落跡 9・10期に盛期

長野市の埋蔵文化財第96集－2

南宮遺跡II

平成13年3月26日　印刷
平成11年3月30日　発行

編集　長野市教育委員会
発行　長野市埋蔵文化財センター
印刷　ほおずき書籍株式会社